

---

# Air Warrior Angel [ ネット版 ]

内藤俊彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Air Warrior Angel 「ネット版」

### 【Nコード】

N6112T

### 【作者名】

内藤俊彦

### 【あらすじ】

遠い未来。突然海面が低下し、地球は深刻な水不足となった。人類は貴重な水資源をめぐって二つの勢力に別れて戦っている。

日々過酷になる戦闘に、軍は高性能なAI、通称天使を投入する。年老いたパイロット、フランク中尉。彼は家族を全て失い孤独だった。ある日、彼の天使のハルが花には何故色があるのかと尋ねる。天使が戦闘以外のことに関心をもつことはない。異常に不安を抱きつつ戦場へと赴く中尉。敵に追われ絶対絶命になった時、彼は奇妙な体験をし、そこでハルが生きたいと叫ぶのを聞く

## 1 - 1 (前書き)

初めまして、内藤俊彦と申します。

前回掲載したものが非常に読みにくかった為、申し訳ありませんが修正させていただきました。

今回の作品は、ある雑誌の投稿用として書き上げたものを元にしていきます。

かなり暗い話になってしまったので、次回作はもう少し明るく楽しい話にしてみたいですね。大人になった小春の話も考えていて、機会があれば書いてみるつもりです。

尚、今回作品中で使った軍事関係の単語や数値はデタラメな部分もありますので、ご容赦ください。あと、この作品を書く際、イメージ作りに大黒摩季さんの『OVERDRIVE』を何度も聴きました。作品の雰囲気が変わるかな？

現在は別の作品を執筆中です。内容はまたまたSFっぽいものになります。もしこちらに投稿した時は、読んでいただけると嬉しいです。ただ自分は書くのが遅いので、いつ頃になるかわかりません。出来るだけ頑張ります……(汗)

それでは、今後よろしくお願ひします。

空は鈍色。

大地は灰色。

目の前に広がる寒々とした砂漠と地平線。

軽やかな電子音。けたたましく鳴り響くアラーム。

金属と合成繊維の手触り。

どこまでも無限に広がる大空。

翼を広げ、音速でダンス。

左右の指先から白く水蒸気の航跡ペーパートレイルを曳く。

めくるめく快楽と興奮に包まれる。

機体の電子システムと接続された瞬間、その全てが私のもの。

遙か彼方の高みから、仲間と共にくすんだ地上を見下ろす。

私は【エアー・ウォーリア・エンジェル】

戦う為に生まれてきた天使。

「これは、何？」

そう言って私が指さすと、フランクリン中尉は訝しげな表情を浮かべた。

「チューリップを知らないのか」

「チューリップという名称は知っています」

私は彼を見上げる。

「では何が聞きたい」

眉間にシワを寄せる中尉。質問が抽象的。要点を整理する。

「この花は、何故、このような色をしているのでしょうか」

ハア〜？ と中尉が首を傾げた。

「チューリップが赤いのは当然だろう……いや、黄色もあつたかな」  
「何故、当然なのでしょうか」

戦術教育用シュミレーター室、通称『子供部屋』。天井の照明は極度に抑えられ、辛うじてモノを見分けられる程度。壁に並んだモニタールミネッセンスの冷光が、中尉の彫りの深い顔を闇の中に浮かび上がらせている。

「そんなことを言われてもな……」

青白い光に浮かび上がる顔が動いた。まるで彫像のよう。

「昔から、チューリップはそういう色だった」

「昔のことは、私にはインプットされていません」

どういふ答えを期待していたのだろうか。自分でも分からない。ただ落胆した。ガツカリした。ガツカリしたという気持ちに微かな驚き。奇妙な興奮を覚える。頭にチクチクと何かが反応した。途端に興味を失う。作業を再開。

「……………」

無然とした顔つきで、中尉が私を見ている。言い方が不味かつたのだろうか。口を開こうとした途端、またチリチリ。作業を続行せよ。了解。

再びモニターに意識を向ける。スリープ状態だった画面が動き出し、先日の戦闘記録が再現された。画面に描かれ続ける航跡と、一時も止まらない数字の列。しかし私は、その情報を視覚で受け取る必要などない。シートから伸びたブライドケーブルから、情報は後頭部の端子を通って脳に送られる。本部のデータベースに蓄積された情報を元に、過去と、そして未来の敵と闘う。何度も死を与え、そして幾度も死んだ。そのデータは再び蓄積され、他の天使によって解析、新たな戦術を生み出す為に利用された。モニターに表示する理由は、ネットに脳を接続出来ない中尉の為に他ならない。

「フン」

中尉が鼻を鳴らした。怒ったのだろうか。彼を見上げようとした途端、また頭がチクチク。作業を続行せよ。了解。

外部から受ける感覚の優先度を落とし、送られてくる情報に集中した。

頬を風が撫でた。

灰色の空が見える。そこにポツンと私は浮かんでいた。

指先に感じる風圧。強力な2基のエンジンが足下で唸りを上げる。その時、眼下にあった雲の隙間から、遙か下方に小さな黒い点。

見つけた……

エンジンが甲高いハーモニーを奏で始める。加速。身を翻して地上に向かってダイブ。

さあ、一緒に踊りましょう。

チューリップが、何故赤いかだと。そんなことを聞かれたのは初めてだ。

赤いチューリップは赤い。赤いバラも赤に違いない。黄色だったら、黄色だということだ。決して誰も赤いバラを青いと言わない。天の邪鬼なら別だが。

「フン」

俺は、一見眠っているようにも見えるハルを眺めながら鼻を鳴らす。

戦術モニターには、先日航空戦の模様を繰り返し表示していた。CGで描かれた鳥瞰図。その中で一個の光点が螺旋を描き、もう一方の光点が、その螺旋の内側を旋回。と、先行していた光点が消えた。撃墜。俺とハルのコンビに、キーマークがプラス。そして、この世から一つか二つの命が消えた。表示される数個のピクセルの塊。その一つ一つが命だ。が、今の自分にはそれは命の輝きではなく、ただコンピュータが描き出した光点到過ぎない。撃墜した喜びも、死者を悼む気持ちもない。無感動に眺めるだけ。

十年か……

振り返れば、それだけの月日を過ごしていた。その間フランクリン中尉と呼ばれる男は飛び続け、闘い続け、そして生き残った。同期だった者たちは、その殆どが空に散っていた。パイロットとして優秀だった。敵より機体の性能が良かった。生き残れた理由ならいくらでも言える。だが一番の理由は幸運だったから。運命と言えればいいのだろうか。幸運なヤツだと言われる。自分でもそう思う。酒

の入ったグラスを傾けた時だけ、な。

生き残っている間は勝者だ。死者は言い訳すら出来ない。  
だが最近、虚しさに襲われる。

世界は滅びかけていた。

原因不明の海面低下。それに伴う環境変化。水資源が不足し、世界中で小競り合いが起きた。やがて世界は二つに分かれ、互いに決定的勝利がないまま、ダラダラと戦が続いている。

こんな世界で、次に殺し合う為だけに生き残ることに何の意味がある。

頭では分かっている。だが死ねない。自殺する勇気もない。惨めでも生にしがみつく。世界中が合唱する。生きる、生きていれば明日がある。ああ、明日はあるさ。殺し合いという現実が。

昔、人の命は地球より重かったらしい。今は羽毛より軽く扱われる。人は他人の命ほど軽んじる。生きていれば必ず良いことがある。希望を捨てるな。そうやって人を煽って起きながら、不幸から抜け出せない人間に対して奴らはこう言う、「自己責任だ」と。苦笑。

死ぬことも出来ない。生きていても希望はない。戦闘機を操る以外、何も出来ない中年男。それが俺だ。

世界は慢性的に続く干魃と飢餓で苦しんでいるというのに、次第になまっていく身体には、厚く脂肪が溜まっていた。視力も落ちていく。本来なら機を降りる歳。しかし戦闘機は幾らでも造れるが、パイロットの数は不足していた。飛べる限りは闘わされるだろう。たぶん死ぬまで。

喉の渴きを覚えた。脳裏にグラスの中で揺れる琥珀色の液体が浮かぶ。そろそろ自室に戻るか。

ふと、先ほどの会話を思い出した。

チューリップは赤い。

それは当たり前だ。何故赤いのかと言えば……たぶん、自分を綺麗に見せるためだろう。何故綺麗にするかと言えば、それは虫をおびき寄せて受粉させて次の子孫を残す為だ。

子孫か。

俺に子供はいない。いや、昔はいた。十年前、未熟児で生まれた娘。わずか数日でこの世を去った。その後、妻とも離婚した。以来つき合った女はいるが、どれも長続きしなかった。

「……………」

プツツとハルの目の前で瞬いていた画面が消えた。

「デブリンクク終了」

抑揚のない声でハルが報告した。まるで機械。いや、機械そのものだ。外見は人と変わらなくても、その肉体に肝心の魂はない。軍でそう教わった。

「スリープモードに移行します」

ハルは目を閉じた。短く刈られた髪を除けば、その寝顔は確かに十代の少女のそれだ。しかし人形のようにも見える。自分の子供も生きていれば、たぶん、ハルと同じ年頃だろう。けれど、その寝顔

はもつと愛くるしく、そして生命力に溢れているはずだ。ハルにはそれが無い。機械だ。人の形をした機械。

そうしたのは軍、いやこの世界かもしれない。

子供部屋は狭く、天井も低かった。こういうのをウナギの寝床と言っただろう。空調は正常なはずだが息苦しさを感じる。左右の壁には、小さなシートがズラリと並んでいた。その全てに一人ずつ、年端もない少年少女たちが身を横たえていた。傍目には死体が並んでいるようにも見える。彼らの正面の壁にも、ハルと同じモニターが埋め込まれていた。そこで繰り広げられる点と線の乱舞を、彼らは身じろぎ一つせず見つめ続ける。

彼らの顔はよく似ていて、全員が東洋人。それは、俺たちが滅ぼした日本人の顔だった。対中国人用の遺伝子兵器を使用した結果だった。中国人も日本人も、ウイルスには区別がつかない。そして僅かに残った日本人の遺伝子から作られたのが、ハルだ。戦闘機に搭載する高度な戦術AIとして、ハルたちは生み出された。俺たちは天使と呼ぶ。闘う天使【エアール・ウォーリア・エンジェル】

現代の空戦は、天使なしでは一瞬たりとも生き残れない。熾烈な戦場だ。だから戦闘機乗りは、常に彼らを背負って飛ぶ。一昔前なら、子供を戦場に駆り立てるなど狂気の沙汰だとマスコミに叩かれたかもしれない。子供の姿だから問題なのだ、必要なのは脳だけ。ならば脳だけを戦闘機に搭載すればいいという意見もあったが、技術者は脳を生かすために必要な機材は巨大になりすぎて機体に詰め込めないという。要するに人間の身体は、効率よく脳を生かすことが出来る器だというのが、開発者たちの主張だった。

天使、か。

寝顔は、そう、確かに天使だ。ただし作り物の。どこの馬鹿が巫山戯て入れたスクリーンセーバーに、首を傾げる程度の人間の出来損ない。ただの消耗品だ。

保守員に連絡するか。

そう思ったが、実務に影響するほどのことでもあるまいと思いついた。消耗品と言っても、ホイホイと代わりを用意できるほど軍に余裕はない。もし交換となれば、俺は暫く飛べないだろう。それは困る。歳が歳だから、輸送部隊に転属ということもありえた。それだけはゴメン被りたい。鈍重な輸送機など、空に浮かんだ棺桶にも等しい。同じ死ぬなら華々しく散りたかった。

大丈夫だろう。俺は勝手にそう判断して様子を見ることに決めた。それに面倒な事は願い下げだ。喉の渇きも限界に近い。

見ると、他の天使たちも作業を終了して、次々とスリープモードに移行し始めた。ボンヤリと瞬いていたモニターが消えると、部屋は闇に包まれた。

端末とPDAを結んでいたケーブルを引き抜き、ハルに背を向けて戸口へと歩き出す。

「お休み、俺の天使」

部屋の扉をロックしながら、そう呟く。室内灯をオフ。就寝。

ブリーフィング。機体の外部点検。コクピットに乗り込み、シヨルダーハーネスをしめる。地下格納庫から、巨大なエレベーターで機体ごと地上の滑走路に運び出された。百近いチェック項目を確認。異常があればハルが報告する。

エンジンスタート。ラプター？のP&W311が目を覚まし、咆哮をあげた。慣性航法装置《INS》をセットして最終チェック、タキシアアウト。キャノピーのロックを確認して、機体を離陸開始位置へ。ブレーキをかけて停止。許可を待つ。管制官の許可が出ると、スロットをミリタリーの位置に押し込む。

空は、ここ数日の砂嵐が嘘のような快晴だった。気温はやや低め。武装は長、短距離ミサイルを各六発ずつの標準仕様。機体は滑走路を軽やかに加速する。ローテーション。離陸。滑走路が途切れる前にギアアップ。サイドステイックを軽く引いて機首上げ《ピッチアップ》。そのまま高度三万フィートにまで上昇、他の機と合流してフォーメーションを組む。背後に小さくなっていくオアフ山基地。眼下の巻雲の間から見えるのは、灰色の砂漠と化した太平洋。かつての海は、深く大地に切れ込んだ海溝に、惨めな屍をさらしているだけだった。その屍を、人間は奪い合う。

今回の作戦では、俺の隊は左翼を担当する。僚機はカナン、副隊長のバルザムとその僚機の名ミ。そして背中の中ハルと、彼女の仲間が三人。パイロットたちは、一人ずつエンジンを背負って飛ぶ。

俺の側に並んだバルザムが、軽く右に翼を振ってから左に横転<sup>ロール</sup>した。剽軽な仕草。奴の癖だ。地上でも空の上でも、人生でも、機知に富んだ言動をするのが信条らしい。

四機でガツチリとエシエロン・フォーメーションを組む。それぞれの機体は百メートルほどの高度差をとった。互いの死角をカバーしながら全周囲警戒。昔と違って戦闘機に死角などない。機体の全面にちりばめられたフェーズド・アレイチップが、周囲を隈無く監視してくれるからだ。スマートジャケットと呼ばれていた。しかし今、その機能はパツシブ、つまり受信のみにしか働いていない。何故なら微かな電波も、敵にこちらの存在を教えてしまう。俺たちのかわりに索敵をするのは、遙か高空を飛ぶAWACSだった。

巨大な電子装置の塊のような機体から、生身の人間なら蒸し焼きにできる強力な電波を発して周囲六百キロ、遠方監視システムを併用すれば実に二千キロあまりの空域を監視することが出来る化け物。そのAWACSは、大昔のB2ステルス爆撃機を一回り大きくしたような形をしていた。動力は原子力。高度六万五千フィートの天空を徘徊し、地上に降りることはまずない。頭上を悠然と舞う姿を、俺も何度か見上げたことがある。センサームーブをいっぱい伸ばしたシルエットは、まるで海中を泳ぐエイのようだった。

AWACSから送られてくるデータに目を通す。以前はこれに監視衛星と電子戦闘シャトルからのものが加わっていたが、度重なる戦闘でその全てが失われた。打ち上げられても、五分と持たず撃墜される有様。低軌道は雲霞のごとく漂うスペースデブリによって埋め尽くされていた。

だがなんだかんだ言っても、パイロットにとって一番信頼出来る警戒システムは自分の目、Mk1アイボールセンサー以外にない。これは昔も今も変わらなかった。

高度三万フィートを維持しつつ、音速で巡航。本日の目標は、敵の前線基地。作戦の主役は戦闘爆撃機。ADF《航空支配戦闘機》

たるラプター？の仕事は、迎撃に上がってくる敵戦闘機をたたき落とすこと。最近の戦況は五分と五分。とにかく俺たちも敵さんも、勝機を掴もうと躍起になっていた。皆、必死だ。自分の命をかけているのだから当然だろう。今日も激戦の予感。果たして何人生き残れるか。

目的地到着まで、あと五分。

『エネミー、オンステージ』

A W A C S の中は冷房が効いているのだろう。戦術士官の声まで涼しげだ。こっちは強烈な日差しで下着がじっとりと汗ばんできた。戦術モニターに視線を落とすと、グリーンで描かれた円の縁に小さな光点がポツポツと現れた。

『ワン、エンゲージ』

『ツー、エンゲージ』

各小隊が、次々と交戦宣言をする。

「ワン、エンゲージ」

俺も宣言。戦法は単純だ。長距離ミサイルを撃って、すぐに逃げる。そして傾合いを見計らって、また攻撃。これを繰り返す。

(HAMRAM1、HAMRAM2スタンバイ)

耳元に囁くような声。ハルは機体に接続されている間一切喋らない。俺とのコミュニケーションはモニター上にテキストで表示するか、もしくはコンピュータの合成音。どちらにするかはパイロット次第だが、俺は音声に設定した。戦闘中に一々モニターを見ている暇などない。

A W A C S の戦術士官は、各機に攻撃する敵を振り分けた。データは機の戦術コンピュータを通して、兵器庫に格納されたミサイル

の弾頭にインプットされる。HMDに攻撃準備完了のサイン。トリガーを引く。

「フォックス・ワン」  
『フォックス・ワン』  
『フォックス・ワン』  
『フォックス・ワン』

まるでエコーがかかったように、カナン、バルザム、ナミが宣言した。

各機から二発ずつのHAMRAM。合計八発。

ウェットベンヘイ兵器庫から押し出されたミサイルは、ロケットモーターに点火、凄まじい加速で飛び去った。すぐに見えなくなる。俺は機体を緩やかに右にロール、高度を下げながら待避する。安全と思われる場所で編隊を組み直した。

再び戦術モニターに視線を落とす。画面には、俺たちの発射したミサイルの他に、幾筋もの長距離ミサイルの描く航跡が表示されていた。ミサイルから送られてくる位置データは、AWACSが受け取って俺たちに転送してくる。航跡は黄色に塗られていたが、ある程度進むとブルーに変化した。ミサイルが慣性巡航に入った。ロケットモーターでマッハ三まで加速して、巡航用のEBRJ《外部燃焼ラムジェット》に切り替わる。初期加速にロケットモーターを使うのは、単にラムジェットがマッハ二以上でないと作動しない理由からだ。

HAMRAM《高速中距離ミサイル》は最終的に音速の六倍に達する。六十キロをわずか三十秒たらずで飛び抜けてしまう計算だ。最速と言われる高高度偵察機でも、その最大速度はマッハ四。それよりも遙かに速い。ミサイルの弾頭部は空気との摩擦で七百度を超

える高温になるらしい。それでどうやってセンサーが敵を捉えるのか不思議なのだが、目標を見失うことはまずない。敵を示していた光点は、一つ、また一つと画面から消えていった。

攻撃は、敵に対し三方向から行われていた。幾重にも張り巡らされた罠にはまり、敵機はなすすべもなく撃ち落とされていく。一分と経たないうちに、戦術画面からその姿は消えた。余りにもあつけない。俺たちは敵の姿を見ることもなく、幾つもの命を奪った。もっとも、それを実感したことなど一度もない。ただ画面に表示されていた光が消え、敵機を墜とした。それだけだ。

『ワン、リアタックだ』

敵の第一波は壊滅した、と戦術士官は判断したらしい。次の攻撃目標を指示する。AWACSのレーダーは敵の第二波を捉えていた。

『ワン、了解』

『ワン、了解』

旋回、上昇して攻撃位置へ。ロックオン。発射。

『オーケー、敵さん尻尾を巻いて逃げていくぞ。俺たちの勝ちだ』

戦術士官の言うとおりだった。撃ち漏らした数機の敵が、散開しながら来た道を引き返していく。

……おかしい。

手応えがなさすぎる。大昔の湾岸戦争ならともかく、今、俺たちが相手にしている敵はこれほど弱くはない。今日の戦術士官は若くて優秀だと聞いていたが、明らかに経験不足のように思えた。そして、その勘は当たった。

「タリホー」

ナミが叫ぶ。ついで彼女は発見した敵を攻撃リストに登録した。瞬時に、その情報は戦術画面に転送された。我々の飛ぶ遙か下、地面すれすれに飛ぶ、ゆらゆらと揺れる機影が八。光学迷彩で機種までは判別できなかったが、小型の戦術戦闘機のような。最初の奴は囷。本命は雲の影に隠れて、こっそりと背後に回り込むつもりだったらしい。

「エンゲージ」

俺は交戦を宣言する。素早く機体を半ロール、逆さまになったところでサイドスティックを引く。スプリットS。Gメーターは六から七の間を揺らめき、俺は歯を噛みしめて体を押さえつける激しい力に耐える。たちまち機体は七千フィートも降下した。振り返る余裕などない。それでもバルザムたちが追って来る気配には気づいた。

若いつてのはいい。俺のような年寄りには、激しい機動は体に堪える。奥歯を噛みしめて苦痛を堪えた。そのかいあってHMDの向こうに敵の姿を捉える。

レーダーは自動的にルックダウンモードに入り、ミサイルにデータを流し込み始めた。その頃になって、ようやく敵もこちらに気づいたようだ。だが、もう遅い。編隊が二つに散開する。こちらのレーダーを妨害する為、ジャミングを奏で始める。レーダー画面はノイズで真っ白になった。が、それも一瞬。ハルがノイズを除去。再びロックオン。シュート。HAMRAM発射。ミサイルは、敵機のケツ目掛けて獰猛な牙を剥き出しにして追う。敵、死にもぐるいで機動《dance》する。地上ストレスでの死の舞。よし、五機撃墜。生き残った三機は、全速力で戦場を離脱していった。だが彼らが選んだ行く手には、ワンのチームが手ぐすね引いて待ち構えている。

これで終わりか。

終わりにして欲しい。心底そう思った。

極度の緊張状態が続いた後、突然その状態が終わると人は気が緩む。経験上、その瞬間が一番危ないと身にしみていた。

ハズなのだが、歳を取るとそんな大事なことも忘れてしまうようだ。

（上空より敵機）

死に神に心臓を鷲掴みにされたというのは、こういつのを言うのだろう。見上げる。上空に黒いシミのような影。まさに死に神の姿だった。ハルの乾いて冷たい声が追い打ちを掛ける。

（機数八、攻撃照準波感知）

近い。高度三万フィートからのパワーダイブ。機種は大型の戦術戦闘機。速度はマッハを超えていた。トロトロと編隊を組んで飛ん

でいた俺たちは逃げ切れない。

A W A C Sは何をしていた。

これほど接近されるまで気づかないというのは、どういうことだ。俺は憤りを感じる。が、理由はすぐに判明した。戦術モニターがブラックアウトしている。A W A C Sとのリンクが絶たれていた。撃墜されたか。

(ミサイル接近)

「ブレイク！」

俺とカナンは左へ、バルザムとナミは右へ急旋回。敵が放った短射程ミサイルも、俺たちを追って二手に分かれる。後方レーダーが捉えたミサイルは四。バルザムたちに向かっていったのも、四発のミサイルだった。

(敵、後方に二)

急旋回の最中でも、ハルは冷静に状況を分析して伝える。こっちはそれどころではない。ミサイルを交わすことしか頭にない。

警告ブザーが鳴りやまない。ミサイルは離れない。着弾まで二秒。速度を下げることも、旋回を緩める事も出来ない。Gメーターは6、7、8、と上がっていく。頭から血が引いていく。視野が狭くなって、景色が色を失った。グレイアウト、だ。耐Gスーツが下半身を締め付ける。意識が朦朧としてくる。

(防御システム作動)

ハルがチャフとフレアをばらまく。効果なし。高度なAIを搭載したミサイルには、この程度の誤魔化しなど通用しない。俺はGに耐えながら、左手のスロットルレバーを指でまさぐる。セレクターを発達型デコイに切り替え、リリースボタンを押し込む。

(デコイ放出)

機体にコバンザメのように張り付いていたデコイが飛び出す。カナンは機体からもデコイが発射されるのが見えた。

発達型デコイは、ラプター？のアフターバーナーに似せた赤外線信号を放射する。ミサイルはその欺瞞信号に騙された。デコイは機体が旋回する方向と反対側に飛び去り、自爆。三発のミサイルを道連れにする。だが、一発のミサイルが欺かれず、旋回をゆるめ掛けたカナンの機体に突き刺さった。

閃光、続いて爆発。

すぐ近くを飛んでいた俺の機体にも、衝撃波と破片が襲う。機体が激しく揺さぶられた。と、グラリとバランスを崩す。あっと思っ間もなく、失速状態に陥った。

「…………ク…………クソツ」

クルクルと駒のように回転する機体。意識が霞んだ状態では状況を把握することすら難しい。本能のまま暴れる機体を必死に押さえ込む。だが七つある多機能ディスプレイのうち四つが消え、残りも激しく明滅を繰り返すばかり。飛行管理コンピュータ《FMC》もフェイル。中枢コンピュータが破壊されたシステムを切り離し、ダイレクトにコントローラしようとするが、油圧システムにも異常を示すコーションライトが点滅していた。灰色の大地と空が、交互に頭の上に現れては消える。駄目だ、墜ちる。

その時だった。ハルが中枢コンピュータに介入、生き残っているシステムを使って一瞬で機体を安定させた。

「……………」

間一髪だった。機体は高度百フィートで水平飛行に移った。しかし危機は去ったわけではない。警報ブザーは鳴り止んでいない。

(敵、接近)

とどめを刺しにきた。

機速は二百ノットを少し超えたあたり。まだボーとする頭で、俺はスロットルレバーをアフターバーナーの位置に押し込んだ。瞬時にP&W311が轟音をあげて吼える。レスポンスは大昔のジェット戦闘機とは比べ物にならない。それでも再びコンバットスピードに達するまで時間が必要だった。その時間を敵は与えてはくれない。

(ミサイル)

数は一。敵は一機が俺にとどめを刺し、もう一機がそのサポートに回ったようだ。速度の落ちた俺などミサイル一発で片づくと思っただろうか。

速度が三百ノットを超える。だがマツ八三以上で迫るミサイルから逃れることなど出来ない。俺は咄嗟にサイドステイックを左へ倒す。横転。すかさず引いて左旋回。チャフとフレアをばらまく。デコイはもうない。

俺は歯を噛みしめて唸る。速度が出ていないので、大したGではない。しかし大旋回をやった後の俺の体は悲鳴を上げていた。

苦しい……

血液が下半身に降りていく感覚。老いた心臓が苦しげに喘ぐ。肺は締め付けられ、腕の毛細血管がプチプチと弾ける。痺れて指先の感覚が無くなりかけていた。全身の筋肉は強ばり、骨がミシミシと音をたてた。

それでも俺は操縦桿を戻せない。

カナンの機体が吹き飛んだ光景が脳裏を過ぎった。

死の恐怖。

それが俺を突き動かす。

絞られていく視界。

薄れていく意識。

肉体の限界は、とうに超えたと思った。

その時だった。

全身を苛んでいた苦痛が、フツと消え去った。

やられたのか？

最初はそう思った。

どれほど最強と呼ばれる戦闘機でも、その機体はとても脆い。小さな破片でも、十分な速度があれば、わずか数ミリの外版を貫く。至近距離でミサイルが爆発すれば、ひとたまりもない。死んだと気づく間もなく、俺は機体とともに消し飛んでいる。

しかし、すぐに違うと気づいた。

見慣れた棺桶のようなコクピット。右手は操縦桿、左手は手前に押し込まれたスロットルレバーの上に置かれている。ただ不思議な事にMFDの画面は全て電源が落ちたように真っ暗になっていた。

ミサイルは、何処だ。

俺は振り向く。

ミサイルはそこにあつた。まるで時間が止まったように、それは空中で停止していた。あり得ない。こんな事は現実ではない。

頭で否定しても、おかしい事に俺自身は何処かでこの事実を受け入れていた。だから、全く動揺はしなかった。

磨かれたシーカーヘッドが見えた。そこに映り込んだ機体。シートに埋もれ操縦桿を握りしめて、必死に加重に耐える俺。振り返ったハズなのに、俺は正面を向いたままの姿勢でいる。なるほど、と納得した。あそこにいるのは俺か。

ああ……

俺は気づいた。これは夢だ。死の間際に見る夢。妻が昔教えてくれた。走馬燈、とってたか。

奇妙な世界だった。

時間がスローモーションのように流れていく。一秒を永遠のように感じ、一瞬の出来事がビデオのコマ送りのようにジッ、ジッ、ジッと動いて見えた。

そこでは迫るミサイルはナメクジみたいにノロノロとしか進まない。アフターバーナー全開中のエンジンに命中するまで、たっぴりと時間があるように思われた。

お前は馬鹿だ。何のために生き残ろうとしている。

どこからか、そう俺に問いかける声が聞こえた。お前は何故生きようとするのか、と。

妻の為か？

ノー、と俺は答えた。彼女とは別れた。

なら、子供か？

違う。俺の子供は、生まれてすぐ死んだ。

ならば両親。

両親は、この戦争が始まってすぐに核で吹き飛ばされた。文字通り、骨も残らなかった。肉親は誰もいない。お前は孤独だ。守るべき者もない。

なら、何故生きる。

自室に戻っても迎えてくれる家族はいない。敷きっぱなしのベッドに寝転がり、体を丸めて孤独に耐える日々。心が渴く。唯一その渴きを癒やしてくれるのはアルコールだけ。喉が渴く。もう一杯。さらに、もう一杯。もっと、もう一杯……

死ぬるのなら、すぐにでも死んでしまいたい。生きていることは苦痛だけだ。それでも死を選べなかったのは、死に伴う苦痛が怖かったから。楽に死ぬ方法があれば、多分迷いはしなかっただろう。

いや、今がその時だ。

俺の、その望みは、この瞬間叶えられる。もう、待つ必要などない。

操縦桿を、ほんの少し緩めよう。そうすれば、背中に迫ったミサ

イルが何もかも吹き飛ばしてくれる。痛みなど、感じる暇もなく。

そうだ。終わりにしよう。何も良いことのなかった人生だ。この醜い世界にも飽き飽きした。何より、自分自身に嫌気がさした。そう、終わりだ。終わりにすればいい。やった、俺は……  
死ねる。

イヤ……

突如、誰かの声が聞こえた。最初は幻聴かと思った。

『死ぬのは、イヤ』

弱々しい、消えいりそうな囁き。だが、聞き覚えがあった。

『生きたい……』

ハル、なのか。

機体の中央、強固な防弾仕様の棺桶の中。そこにハルがいた。棺桶には窓がない。当然、外から彼女の姿を見る事など出来ない。それなのに……何故か、俺は座席に埋もれるようにして座っているハルを見ていた。

ハルが顔を上げた。幼い少女の顔。黒い瞳が揺れている。その瞳と視線が絡み合った。

『死にたくない……私は、生きたい！』

「！」

まるで落雷が落ちたかのように、全身が痙攣した。目を見開く。途端に強烈な苦痛が襲いかかった。俺は獣のように悲鳴をあげた。強大なGが、俺の目玉を、心臓を、血管を押しつぶそうとした。

呼吸さえ出来ない。それでも俺は、右手に握った操縦桿の感触を思い出す。

「アアアアアア！」

自分が何をしようとしているのか。ただ、操縦桿を折るような勢いで引いた。その途端、機体は信じられない機動をした。

マヌーバ・リミッターが自動で解除。アフターバーナーを焚いたまま推力変更パドルが上を向く。噴流が強引にねじ曲げられる。機体は旋回を続けながら、更に機首を内側……進行方向に対し垂直に立ち上がる格好になった。一気に空気抵抗が増加。機体は急ブレーキがかかったように瞬間的に速度を失う。空戦中に速度を失うのは、戦闘機乗りにとって致命的だった。だがこの場合、それが幸いした。

予測もしていなかった俺の機動に、追ってきたミサイルは追尾しきれず、目標を見失う。そのままあらぬ方へと飛びさった。そして二機の敵機が、俺の鼻先を掠めて前に飛び出す。

ピー、というオーラル音が鳴り響いた。

短射程ミサイルのシーカーが、二機の熱源を捉える。無意識のうちトリガーを押し込む。シュート。敵が必死に回避運動に入るが、間に合わない。撃墜。バラバラに砕け散る破片が、灰色の大地に降り注ぐ。

機体を水平に戻す。周囲に敵の姿はない。味方も……

「……………」

暫く、呆然としていたように思う。

「ハル」

(ハイ)

囁くような声が返ってきた。

「お前は……今、何と言った」

考えこんでいるような間があった。

(質問の意味が不明です)

空耳だったのかと俺は訝しむ。試しに状況を確認。

(通信システムに異常発生。現在全ての戦闘情報リンクがダウン)

戦況がどうなったかはわからない、ということらしい。いつものハルと変わらない。

「帰還する」

バルザムやナミの安否も気になったが、合流しようにも、リーダーは故障していた。敵もまだ辺りをウロウロしている。俺は基地へと機首を向けた。

結局、部下は一人も戻ってこなかった。

静かにデフリンクを続けるハル。その隣に三つの空席があった。カナンとバルザム、そしてナミと一緒に散ったエンジェルたちの席空席は彼らだけではない。子供部屋を見回すと、あちこちに空席が目立つ。

先日の戦闘は悲惨のひと言に尽きた。こちらの戦果は敵の前線基地一つ。損害は出撃した機数の半分と虎の子のAWACS。上層部は勝利宣言を発表した。その根拠として撃墜した敵機の数をあげたが、それも疑わしいものだ。誰も口にはしないが、あの前線基地は圏で、俺たちは罠に誘い込まれたのだというのが、実際に戦った俺たちの見解だった。撃墜した敵の大半も無人機だろう。上は否定しても、現実には惨敗の一言に尽きる。

だが、そんなことは俺にはどうでもいい。むしろ三人の部下を一度に失ったシヨックの方が大きかった。プライベートでのつきあいは殆どなかったが、空に上がれば三人とも優秀だった。新しい部下が来るとしても、彼らほどの腕のいいパイロットの可能性は低い。もともと俺が降格しなければの話だったが。

俺はまた独りになった。

「ハル」

呼びかけると、ハルは半分閉じていた瞼をゆっくりと持ち上げた。

『指示をどうぞ』

シートの脇に取り付けられたスピーカーから音声流れる。それは確かにハルの声なのだが、実際は機械で合成された音声だ。感情は全く感じられない。普通の人間が喋る時に見せる癖も、音の揺らぎも、言い淀むこともない。規則正しく、正確なリズムで発音された記号でしかなかった。

「お前に聞きたいことがある」

俺は用心深く周りを見渡す。子供部屋には俺以外の人間はいなかった。盗み聞きされる心配はない。それでも俺は、用心深くハルの耳元まで屈み込んだ。

「お前、死ぬのが怖いかな？」

激しいドックファイトの連続でボロボロになっていた俺は、生きることを放棄しようとした。そこに聞こえたのがハルの声だった。「死にたくない」と確かに聞いた。聞き間違えたのも幻聴でもない。後から思い出すたび、それははっきりと俺の耳に響くのだ。「死にたくない」と。

『質問の意味不明』

素っ気ない反応。はぐらかせているようにも見えない。本当に、意味が分からないのだ。攻め方を変えよう。

「先日の戦闘、D82地区における戦闘記録を再現しろ」  
『了解』

ハルはホストコンピュータにアクセス、要求された戦闘記録を画面上に再現した。戦闘機が四機、一糸乱れぬフォーメーションを保って飛ぶ姿が3Dで描かれる。と、その内の二機が横転。俺とカナンド。背面飛行に入ると同時に機首上げ。スプリットS。僅かに遅れてバルザムとナミも、俺たちの後を追って反転。二人はバックアップだ。特に指示しなくとも、バルザムは俺の考えていることを補佐してくれる。そういう奴だった。

四機は、見ている者には緩やかな。しかし操縦している俺たちは苦痛に呻きながら。巨大なループの後半を滑り降り、地面すれすれを飛ぶ敵の背後に回った。ロックオン。シュート。八発の撃つ放しミサイルが敵に向かっていく。

「ハル、ここはいい、もつと先だ」  
『了解』

ハルは画像を早送りする。幾つもの光跡が画面を走り抜ける。もう何度も見た。俺の興味は記録の一番最後。戦闘空域からの離脱直前の場面だった。

「止める」

再生速度が通常に戻る。描かれている戦闘機は一機だけ。俺、だ。

高度は百フィートを下回る低空飛行。無理な機動で速度は低下し、機体はあえぎながら旋回を続けている。そこへ、まるであざ笑うかのように高速で飛び込んでくるミサイル。

俺は最後の抵抗を続けていた。が、それも限界と思われた瞬間、機体は信じられない機動を見せた。旋回中にも関わらず、強引な機首上げ。それは一瞬だが機体の限界値を超えるほどだった。CGで描かれた軌跡は海賊フック船長のかぎ爪を思わせる形をしていた。当然、そんな無茶な機動で、機体は急ブレーキをかけたように空中に停止。予想もしていなかった動きに、ミサイルは目標を見失って画面の外に飛び去る。

「もう一度、五秒戻して、今度は機内での音声を再生しろ」  
『了解』

巻き戻し。再生開始。今度は俺の息づかいが聞こえた。苦痛に呻き声あげていた。何度聞いても気持ちのいいものじゃない。暫くすると「うおおおおおおお」という雄叫びが聞こえた。敵機の赤外線信号をミサイルのシーカーが捉えたオーラルトーンが聞こえる。シュート。キル。

「もう一度だ」  
『了解』

ハルはさっきと同じ場所を再生した。再び自分の呻き声を聞く。そして雄叫び。オーラルトーン。キル。敵を仕留めた。

「もう一度だ」

俺の命令に、ハルは嫌な顔一つせずに従う。再生。同じ事の繰り返し

返し。

「ない」

俺は、自分の耳を疑うしかなかった。

「確かに、あの時お前は『死にたくない』と言ったはずだ」

なのに記録には何も残っていない。改竄された可能性はなくないが、そんなことが出来るのは上層部くらいだ。だが彼らがこの記録を改竄しなければならぬ理由を、俺は思いつかなかった。

やはり空耳だったのか。

そんな風に俺は考え出した。第一、ハルに変化はない。感情を示さない顔でモニターを見続ける人形だった。あの時間こえたハルの「死にたくない……」という囁き。あれは人としてごく普通の、死の恐怖に対する感情だ。今のハルから、それは感じ取れない。

一体、何だったのだろうか。

俺はハルをジッと見下ろした。暫くそうしていたが、フツと溜息を漏らす。

馬鹿馬鹿しい……

「もういい、任務に戻れ」

『了解』

ハルは作業に戻る。他に答え方はないのか、と俺は突っ込みを入れたくなったが、そんなことをしても無駄だと思って止めた。機械は、プログラムされた通りにしか動けない。

画面はスクリーンサーバーが働いて、また例のチューリップの画像に切り替わっていた。

風に揺らめく花が、メトロノームのように左右に揺れている。それに背を向けて、俺は部屋を出て行くとした。

『サ……イ・タ……サ・イ・タ、チューリップノハ・ナ……』

！

息が止まった。

慌てて振り返る。

ハルは、静かに戦闘状況の分析を続けている。いつもと変わらぬい姿。だが、しかし、俺は見た。彼女の口元がゆっくりと閉じられていくのを。

歌っていた。

ハルは歌ったのだ。

誰も教えてくれないはずの歌を。

「……………」

ハルは何もなかったかのように振る舞う。違う。ハルは意識してやっているわけではない。本人にも気づかない変化が、彼女の中で起こりつつある。

俺はハルを見つめる。疑念は、確信へと変わりつつあった。報告すべきだ。そう考えた。けれど、心のどこかで、それを拒絶している自分を感じていた。

何故だ。どうしてそう思うのか理解出来ない。何より、どうして俺は生き残ろうとしたのか。生きる事に未練はなかった。むしろ望んでいた。

いや、違う。

あの時、俺が守ろうとしたのは自分の命ではない。

ハルだ。

ハルは決められた作業を黙々とこなす。

その姿は、十歳の少女。俺の娘も、生きていれば丁度これくらいの年頃だ。

もしかして俺は、亡くなった娘を気がつかないうちに重ねていたのか。

何を馬鹿な。

俺は一人で苦笑した。

本当の娘なら成長し、やがて美しく嫺やかな女性になるだろう。

ハルは違う。成長抑制剤を定期的に投入されることで、天使は永遠にこの姿のままだ。老化が進み、抑制剤の効果がなくなる頃には廃棄される。永遠の子供。

コレは、ただの機械だ。人間の形をしても、その中身は空っぽ。生きているわけではない。ただプログラムされた通り、教えられた通りに動く人形。人形に感情なんかあるものか。人形と娘を一緒にするなんて、どうかしている。馬鹿なことを考えるな。俺は頭を振る。

やはり明日、報告しよう。

そうすれば、ハルは工場に戻されて再検査されるだろう。場合によつては処分だ。そして俺には新しい天使が配備される。欠陥品など背中に担いで飛んだ日には、命が幾らあっても足りない。俺は報告書の作成の為に、子供部屋から真っ直ぐに自分の部屋に戻った。

だが結局、俺は一枚の報告書も書けなかった。

中尉がジツと見つめている。

不意に浮かんだ言葉とリズム。誰かに教わったわけでも、プロゲラムされたのでもない。ただ意識に浮かび上がったきたもの。きつと誰かが口にしたのを、無意識に記憶していたものだろう。でも、それが中尉の関心を引いた。

サイタ、サイタ、チューリップのハナが……

目の前で揺れる花、花、花……

ナランダ、ナランダ……

アカ、シロ、キイロ……

その言葉とリズムの意味が分からない。でも、画面の中の花々を見てみると、奇妙な感覚を覚えた。

幼い記憶？

いいえ、私には幼い記憶などない。生まれた時からこの姿。気がついた時には、この部屋にいた。部屋から出るのは、戦闘機に乗り込む時だけ。

私は戦闘機の部品。脳は高性能なコンピューター。細い手足は移動と機体に乗る込むに必要。眼はモニターを見る為、耳は命令を聞く為、口は「了解」と応える為。必要ないものはない。

だけど、何故、この花たちはこんな色をする必要があるのだろう。分からない。中央指令部のホストコンピューターは、その質問をエラーとして受け付けなかった。

この世界には、私の知らない事がある。

目覚めは、最悪の気分。

睡眠導入剤代わりの安酒のせいかもしれない。

夢の中に現れた小夜子、俺の妻だった彼女は泣いていた。生まれ  
たばかりの娘を失った。その悲しみに打ちのめされた俺たち夫婦。  
毎晩のように小夜子は泣き続け、俺は仕事に逃げた。

どうしてなの？

小夜子は両手で顔を覆って俺を責めていた。指の間から涙が溢れ  
てこぼれ落ちた。俺はただ見つめておくことしか出来ない。

あなたは、いつもそう、肝心な時に逃げるのよ。

逃げてなんかいない。俺はそう反論しようとして口ごもった。小  
夜子が顔を上げる。泣きはらした赤い目で俺を見上げる。

お願い、フランク、私を……私をちゃんと見てよ。

そこで、目が覚めた。

医者は、精密検査の必要があると俺に告げた。

「だろっな」

俺はワイシャツの袖に腕を通しながら、まるで他人事のように応

じる。実際、他人事だった。パイロットとしてすでに適齢期を過ぎたことは認識している。今更注意されることでもない。

「骨も内蔵もボロボロじゃ」

俺の態度にまるで無頓着に、老人は机の上のカルテに顔を向けたまま喋り続ける。

「パイロットという仕事は激務だな。それも戦闘機となると……  
適当な言葉を僕は思いつかんよ」

これまで何百人というパイロットを見てきたのだろう、諦めたよ  
うな、呆れたように肩をすくめた。

「生き残るためだ」

脱いでいた服を着てしまうと、俺は立ち上がって出ていこうと  
した。

「またんか、話はまだ終わっておらん」

立ち止まって振り返った俺に、彼はここに来て初めて目を合わせ  
た。その顔には深い皺が刻まれている。肌はシミだらけで、疲労だ  
ろうか、両眼の下には黒く隈が浮き出していた。診察が必要なのはあ  
んたじゃないのか、という言葉は俺は飲み込む。

「手短に頼む、このあとブリーフィングがある」

「わかっとなるわい……いいかの、お前さんはもう限界じゃ。体力も  
そうじゃが、内蔵を酷く痛めとる」

酒を絶てと言う。

「そりゃ無理だ」

俺はニヤリと笑って返した。

「友達を失いたくない」

「その友達が、お前さんの寿命を縮めているとしてもか」

長く生きるつもりはない。俺はそう答えようとして止めた。そんなことを口にすれば、このお節介な医者も長々と俺に説教を垂れるに違いない。

「酒も煙草もやりすぎは毒だ」

「煙草は止めたよ、ずっと昔にな」

学生の頃まで、俺はヘビースモーカーだった。だがパイロットとして歩み始めた頃から、何となく控えるようになった。理由は簡単だ。気化した航空燃料が漂うハンガーで爆死したくはなかったからだ。そして子供が生まれた時、完全に止めた。

「平和な時ならデスクワークに回される歳だぞ。とにかく、もう無理をする必要もあるまい」

俺は首をグリグリと回す。ザリザリと首の骨が擦れる音が響いた。長い間強烈なGに耐えていたせいで、首の骨の軟骨がすっかり減ってしまっている。

「それを決めるのは上の連中だ」

俺ではない。そして上層部は俺を地上に降ろすつもりはないだろ

う。戦闘機は幾らでも製造出来るが、パイロットの絶対数は不足していた。老兵にドックファイトは無理でも、ミサイルキャリアーの役目くらいは出来る。

「とにかく、精密検査くらい受ける」

医者はガンとして譲らない。幾ら俺が必要ないといったところで、この目の前の頑固爺には通用しそうになかった。それにパイロットの健康状態は彼が把握している。下手に怒らせて資格剥奪という事になったら目も当てられない。俺は飛ぶ以外、何も取り柄のない男だった。

「わかったよ」

渋々と承諾する。老人はウムと無言で頷いて机の上に置いたカルテに視線を戻した。「検査日はおって連絡する」と言うと、彼はヒラヒラと俺に向かって手を振った。行ってしまえということらしい。俺は回れ右をすると、医務室を出た。もちろん彼にお辞儀も敬礼もしない。

ブリーフィングが終わり、いつも通りの手順を踏んで、俺は地上から飛び立つ。高度二万フィートを巡航。本日の任務は戦闘空中哨戒《CAP》。雲一つない空は、遠くまでクリアに見渡せた。

敵影なし。味方機は左斜め後方にいるマイク少尉の機体のみ。穏やかな日差し。現在地確認。ナビと地図の照合。定時報告。ルーチンワーク。キャノピー越しに見える干からびた大地の連なりは刺激もなく単調で、眠気を誘う。

俺はマスクの中で欠伸をかみ殺した。

「少尉」

『はい』

返事が返ってくる。俺と少尉の機体を結ぶ回線は、常にホット。つまり常時繋がったままだ。回線は指向性のあるレーザーで行われるので盗聴の心配もない。

「少し聞いてもいいか」

急にそう思い立ったのは、レシーバーで彼の欠伸を聞いたからだ。向こうも気がゆるみ始めているようだ。気を紛らわせる必要があった。

俺の部隊に配属された三人のうち、彼は最年少だった。驚いたことに、今年二十二歳になったばかりだという。一応士官学校出だというが、実戦経験はなし。機上時間も合計で二百時間にも達していない。本物のヒヨコだ。相当鍛え上げなければ、こちらの身が危ない。こんな素人に毛が生えただけのようないパイロットを最前線に送り込まなくてはならないほど、本国はファイターパイロットに不足

しているのか。

どうぞ、と返答。

「少尉の出身はソルトレイクだそうだな」

どんなところだ、と世間話を始めた。もちろんユタ州のソルトレイクのことは、俺も知っている。冬季オリンピックが開かれた街だということも。俺が生まれるずっと前の話だが。

『何もない街です……でも、良いところでした』

過去形になるのは、すでにソルトレイクシティが消えているからだ。二年前、敵の大規模な核攻撃で、ユタ州の三分の二が人の住めない荒野と化していた。

『自分はネバタの士官学校にいたので助かりましたが、両親と姉は……』

マイクの口調が沈み込む。「そうか」と俺は応えるにとめた。同情はするが、多かれ少なかれ今は誰もが肉親や友人を失っている。一々感傷的になっていたのでは身が持たなかった。グズツと鼻を嚙る音が聞こえた。マイクは涙ぐんでいたようだ。次に聞こえてきた彼の声は、無理に明るく振る舞っているように俺には思えた。

『中尉はどちらのご出身ですか？』

「ニューヨークだ」

壊滅的な打撃を受けた東海岸と対照的に、西海岸は比較的被害が少なかった。

『じゃあ、ご家族もそちらに』

「妻とはずっと前に離婚した。子供はいない」

マイクが「スミマセン」と呟く。それきり会話は途絶えた。俺は心の中で舌打ちをする。話題の選択を間違えた。バルザムが生きていたら、それとなく新入りに俺のことを教えていたに違いないが、彼はもういない。

予定のウェイポイントで進路を北に向ける。GPSは全く使えない。現在地を割り出すには、機のコンピュータ群とハルが弾きだした数字を照らし合わせるしかない。最悪の場合、膝に縛り付けた地図が命綱になる。もちろん今日もAWACSが上がっているので、よほどのことがない限り迷子になることはない。

『ニューヨークって?』

お互いに気まずい思いをして黙ってから、ずいぶん時間が経っていた。だから急にそんな質問されて、俺は少々面食らった。

「なんだ、ニューヨークに行ったことがないのか?」

と逆に質問しようとして、俺はハッと気づいた。

今のは、マイクの声じゃない。

『ねえ、教えて……』

舌足らずな、幼い子供が喋るような声。トロンとした、どこかボヤリした口調だった。

『ニューヨークってどんなトコ?』

子猫が甘えて体をすり寄せてくるような声のあとに、クスクス笑いが続く。

背筋がゾツとした。通信回路はオープンのままだ。ハルの声はマイクの耳にも届いているはず。

「ハル」

俺は叫んだ。

(ハイ)

いつものハルの声。眠りから覚めたように、彼女はいつもの調子に戻った。

「マイク、聞こえたか」

俺は慌てて尋ねた。

『エツ?』

鳩が豆鉄砲でも食らったように、マイクはタツプリと一呼吸分どもってから、怖ず怖ずと申し訳なさそうに応えた。

『すみません、もう一度言っていただけですか』

どうやら、俺の命令を聞きそびれたかと思っっているようだ。俺はホッと胸をなで下ろす。何故だか分からないが、ハルの声は俺にしか聞こえなかったようだ。いいだろう、このまま彼の勘違いを押し通すつもりで命令を出す。

「現在位置を確認する、そちらの天使を呼び出して数値をはじき出せ」

『了解』

即座にマイクが背中中の天使にアクセスするのが、俺のレシーバーにも伝わってきた。彼が結果を出すまで、数秒を要するだろう。

ハル、どうしてお前の声は俺だけに聞こえる。

頭の中で、そうハルに向かって質問した。幻聴とは思えない。しかし、この前の戦闘記録にもハルの声は残っていなかったし、今もマイクには聞こえなかった。超能力というものを俺は信じていない。それでも まさか という可能性を否定出来なかった。

俺が被っているヘルメットには脳波を読みとるシステムが組み込まれている。脳波だけで機体をコントロール出来るほど高度なものではないが、パイロットがGで失神した時に、操縦を天使側に切り替えて墜落するのを防ぐような機能がある。もしかすると、ハルはその回路を利用して俺に語りかけているのでは、と思ったのだ。

「……………」

返事はない。それでも俺は、空耳だったと自分を誤魔化すことは出来なかった。ハルの中で、何かが変わっている。冷徹な機械ではないもの、何か……そう、感情。人間のよような感情が芽生えだしているのではないか。彼女は人間らしさを取り戻そうとしているのか。分からない。結論を出すには、俺には知識も情報も欠けていた。相談できる友もない。俺はどうすればいい。

現在位置を報告してくるマイクの声を、俺はボンヤリと聞き流していた。

「ねえ、この子の名前どうするの？」

小夜子が大きく膨らんだおなかを、愛おしそうに両手で撫でていた。

「名前、か」

俺は読みかけの雑誌を膝の上に置く。妻を見る。まぶしい笑みだ。幸せではち切れそうな妻の笑顔。俺も幸福感で満たされる。自然としまりのない顔になってしまう。

なあに、その顔。

小夜子はコロコロと笑った。初めての自分の子供。それが今、妻のお腹の中で日に日に大きくなっている。俺は嬉しくて、嬉しくて、思わず彼女の身体を抱きしめた。腕の中に収まった小夜子の身体からは、もう母親の匂いがした。

それで、どうするの？

「そうだなあ、と俺は幾つか思いついたものを口にする。」

駄目よ、それじゃあ。

小夜子は華奢な体つきに見合わず気が強い。時には頑として自分の意見を曲げなかった。

「じゃあ、小夜子はどんな名前にしたいんだ」

小春、恵、千代子……

「なんだ、日本名じゃないか」

アメリカ人の俺としては、少々不満だった。

だってあなたと私の子なのよ。自分が何処で生まれたのかすぐに分かるような名前の方がいいでしょう。

「しかし、全部女の子の名前だ」

まだ生まれてきてもないのに、何で女の子だって決めつけるのか。

分かるわよ……だって私が母親なんですもの。小夜子は、そういつてまた笑った。

世の中には情報が溢れている。

だが必要な情報を手に入れるには、スキルがいるという事を初めて知った。求める知識を手にいれるには、それを得る為の知識が必要だと。天使の情報を調べようとした俺は、それを嫌という程思い知らされた。

戦争でスタスタになりアクセスできる地域も限定されているが、今もインターネットは健在だった。だが基地の端末は監視されていて下手な事は出来ない。娯楽室にはゴシップと女の裸の写真だけ。誰も入らない図書室には、埃を被った教本しかなかった。

仕方なく俺は、正面から攻略する事に決めた。  
つまり、本人を問いただす。

「入れ」

俺が促すと、ハルは指示された通り俺の部屋に足を踏み入れた。彼女の後について俺も部屋に入り、後ろ手で扉を閉める。鍵をかけたのは、やましい気持ちがあったからではない。他人に覗かれるのが心配だったからだ。ハルの変化を誰にも知られてはならない。もしこの事がバレれば、俺の立場も危ういが、ハルも処分される。それだけは絶対に避けたかった。

厳密には、子供部屋から天使を連れ出すことは規則で禁止されていた。だから俺の部屋にハルを連れてくるには、出来るだけ人気のない通路を選んだ。だがそう物事旨くないかない。途中、俺がハルを連れていくのを、同僚のタイラーに見つかってしまった。

「ヘイ、フランク、お楽しみかい」

彼は微かな驚きと、口元に嫌らしい笑みを浮かべて俺を見た。関わり合うのも面倒だったので、俺は口を閉ざした。パイロットの中には、天使を自分の欲望のはけ口に行っている奴がいるという噂を耳にしたことがある。タイラーがそれと勘違いしたとしても無理はない。もちろん俺に、そんな趣味はない。

「そっぴゃあ、お前と別れた女房も日本人だったな」

俺の妻だった小夜子は、沖縄生まれの沖縄育ち。当時、嘉手納にいた俺は、行きつけの飲み屋で彼女と知り合った。一目惚れだった。

「日本人で思い出したが、情報部の奴が面白いこと言ってたぜ。あいつら全滅したって話だけど、どうやら生き残りがいるらしい。衛星から送られてきた写真に、村のようなものが写っていたんだ。しかも家の煙突からは煙が出ていたとよ」

俺は片手でハルの背中を押すようにして、タイラーに背を向けた。例えそれが本当の話だとしても、俺には関係がない。何故なら、そこに小夜子がいることは絶対でない。彼女は島ごと核で吹き飛ばされていた。

「とりあえず座れ」

士官室とはいっても、部屋はベッドが二つ並べばいっぱいになるほどの広さしかなかった。机やベッドは全て壁に収納できるようになっている。男鰥にはそれで十分なスペースだった。俺は小さなスツールを引っ張り出して腰を降ろす。と、そこで肝心な事に気づいた。部屋に椅子は、これ一つしかない。今、俺が腰掛けているやつだ。ハルの座る場所がなかった。案の定、彼女は部屋の中に突っ立たままだ。

「ベッドでいい、ベッドに座れ」

そう言うと、ようやくハルはぎこちない動きで俺のベッドにちょこんと腰掛ける。敷きっぱなしのシーツや毛布は、俺の汗で湿り、強烈な悪臭を放っているに違いない。が、ハルはそんなこと気にもしていないのか涼しい顔をしていた。

「……………」

ハルは微動だにしなかった。ただ俺の命令を待っている。まるで人形だ。微かに上下する胸に気づかなければ、マネキンと勘違いしてしまう。でもマネキンとは違う。触れれば、その白く抜けるような肌は暖かい。電子機器との接続の邪魔にならないよう、髪は男の子のように短く刈り込まれていたが、強く握るとポキリと折れてしまいそうな細い首からなだらかな肩まで続く柔らかなラインは、年頃の女の子らしさを感じる。

俺の視線に気づいたのか、急にハルが俺を見返した。

『命令をどうぞ』  
「ちよっと待ってる」

真っ直ぐに見つめられた俺は、何故か自分がどぎまぎしているのに気づいた。胸がギュと締めつけられる。今まで忘れていた何かが、胸の奥に疼く。俺もまだ男だ。もう何年も女つ気のない生活をしてきたせいだろう、ムクムクと沸き上がってくる衝動を覚える。

クソッ。

息苦しさを感じた。頭の隅で、ハルをここに連れてきたことを後悔していた。

エーイ、今さら迷ってどうする。

馬鹿が。俺は自分を自分で罵倒する。後戻りしたところで、問題は解決しない。何としても確かめなければならなかった。ハルが人間なのか、それともただの機械なのか、を。

そうしなければ、俺はもう戦えない。

天使がただの機械なのか、それとも俺たちと同じように感情を持った人間なのか。必死に雑念をふりほどき、机の引き出しに手を入れてゴソゴソとかき回した。ところが、例のものが見つからない。

俺は次第に焦りを感じた。このままだと、俺は本当にハルに手を出しそうだった。心を落ち着かせて、アレを何処にやったかを思い出そうとする。が、そうしようとした矢先、それは唐突に指先に触れた。

あった。

ホッと胸をなで下ろす。取り出す。B5サイズの小さな絵本。初めて、自分の子供へのプレゼントとして買ったものだ。

変な人、まだ言葉も分からないのよ。

妻が産後のやつれた、しかしこの世の幸せ全てを甘受した表情で俺にそう言ったのを覚えている。

「話しているうちにわかるようになるさ」

俺は照れ笑いを浮かべた。妻の隣には、俺たちの子供がスヤスヤと安らかな寝息を立てていた。妻の言っていた通り、女の子だった。最高に幸せだった時間。もう、ない。

「ハル、これを見ってみろ」

俺は絵本をハルに向かって差し出す。ハルは俺をジッと見つめたまま動かない。

「この本を、手に取って見るんだ」

俺が一語一語、正確に命令すると、ようやくハルは両手を差し出し、絵本を受け取った。それを膝の上に置き、ジッと見る。けれどいつまで経っても、ハルは本を開こうとしない。表紙の絵に見入っているのではない。俺に命令された通り、ただ見ているだけ。

「違う違う、そうじゃない」

俺は段々イライラしてきた。俺自身、一体ハルに何を期待しているのかも分からなかったが、兎に角、こうしていても埒があかない。

「これは絵本っていうんだ」

俺は椅子から立ち上がり、ハルの隣にドシンと腰を降ろす。耐用年数の過ぎたベットが、キィーキィーと耳障りな悲鳴を上げる。

「エホン？」

ハルが首を傾げる。

「そつだ、絵本。物語だよ。こうしてページを捲って……」

俺はハルの手を取って絵本を捲らせた。スベスベした表紙の端は、かなり黄色く変色していた。最初のページが目飛び込む。タイトルは『猫になった王子様』

正直な話、俺はこの本を買ってから一度も目を通したことがない。生まれたばかりの自分の子供に読んで聞かせるつもりで本屋に立ち寄ったのだが、棚に山のように並んだ絵本を見た瞬間に頭が真っ白になってしまった。結局自分では選べず、店員の薦めたこの本を選んだ。しかし生まれた子供は、僅か数日で人生を終えた。絵本は一度も開かれることなく、本棚の隅に放って置かれた。

小夜子と別れた後、俺は彼女の匂いを消すため、身の回りのものはほとんど処分した。だが、これだけは何故か捨てられなかった。もう本がある事も忘れかけていたのに、何故かハルに見せてみようと思い出した。

「……………」

ハルは無言で猫の絵を、何度も手のひらで撫でる。何をしているのか、俺には理解出来ない。もしかすると、絵本に描かれた猫を撫でているつもりなのかもしれない。ハルだって文字を読むことは出来る。このまま暫く様子を見るのも一つの手だったが、俺は彼女に寄り添うと、彼女の頭越しにのぞき込むようにして絵本を読み始め

た。

「昔々……」

定番のフレーズから始まる物語。内容は、こうだ。

昔、ある所に平和な王国があった。

その王国には、一人の王子様と、とても可愛らしいお姫様がいた。二人は幸せに暮らしていたが、ある日、その幸せを妬んだ悪い魔女によって、王子様に呪いが掛けられてしまう。王子は一匹の青い瞳の黒猫になってしまった。

残されたお姫様は、王子の呪いを解くために、七人の勇者を連れて旅に出る。そしていくつかの冒険をして、ようやく王子の呪いを解く方法を見つけた。その方法とは、人々が王子に感謝すること。

ただし条件がある。猫の正体が王子であることを話してはならない。お姫様と七人の勇者は、ホトホト困り果てた。王子は国民にとっても愛されていた。でもその王子が猫になってしまったことは国の秘密になっていたし、猫が本当は王子だなんて誰も信じてくれそうにない。このままだと彼は一生猫のまま過ごさなければならぬ。そう諦めかけた時、一向はとある街に辿り着いた。

彼らは街の窮状を知った。なんと街は凶悪なネズミたちによって滅茶苦茶にされていたのだ。しかもネズミたちの数は信じられないほど多く、とても退治することが出来ない。

そこで街の偉い人たちが頭を寄せ、どうすればいいかを考えた。考えあぐねた末、一つの案が出される。それは巨大なチーズでネズミたちをおびき出し、街の外へと連れだしてしまおう、というものだった。

しかし問題が一つある。誰がチーズを持って、ネズミたちを連れ出すかだ。凶暴なネズミたちに散々な目に遭わされていた街の人々は、怖がって誰もその役を引き受けなかった。何しろ街にいた猫たちを追い散らしてしまうほど強いネズミたちだったから。

「僕がやるよ」

と、手を挙げたのは猫になった王子だった。

「僕は猫だから、みんなよりも素早く動ける。狭いところだってへっちゃらさ」

当然、お姫様は反対した。けど王子の決意は固かった。

さっそく街の人が用意した特製チーズを背中に縛り付けた王子は、街中を駆け回った。そして匂いに釣られて出てきたネズミたちを連れ、街の城壁の外へと走り出る。そのまま跳ね橋を渡り、近くの森にまでネズミの大群を誘導すれば、全て終わるはずだった。が、上手く行かないのが世の常だ。

跳ね橋のところまでたどり着いた王子。だが、なんと跳ね橋が落ちていた。どうやらネズミたちが橋の木材をかじってしまったらしい。王子は深い堀の手前で呆然とする。背後にはネズミたちの大群が刻一刻と迫る。

仕方なく、王子は背中に負ぶっていたチーズの塊を堀に投げ込もうとした。ところがチーズを身体に縛り付けていた紐の結び目が堅く締まってほどけない。手元にはハサミもない。王子は焦った。このままだとネズミたちは王子からチーズを奪って街に戻ってしまう。そこで、彼は覚悟を決める。

「さようなら」とその場にはいないお姫様につぶやき、彼は深い堀へと飛び込んだ。後を追うようにして、ネズミたちも堀になだれ込む。一匹残らず。

暫くして、様子を見に家から出てきたお姫様と勇者たちは、堀の中に浮かんだネズミたちの死骸と、その中に一匹だけ浮かんでいる黒猫の死骸を見つけた。

(なんだ、こりゃ)

俺は舌打ちしたくなるような気分になった。

まさか、こんな内容の本だとは思わなかった。少なくとも子供に読み聞かせる内容ではない。子供にはもっと、こう、可愛らしくて愛嬌のあるキャラクターたちの溢れるファンタシーな世界感のあるストーリーがいい。主人公が死んでしまうような話は、とてもじゃないが小さな子供には理解出来まい。何よりハルには自己犠牲などという価値観は分からないだろう。読むのを止めようかと思った。ところが、ハルは「続きは？」といった様子で、言葉を詰まらせた俺の顔を不思議そうに見上げている。ここで止められそうにない。俺はページをめくった。

泣きながら、冷たい猫の亡骸を胸に抱くお姫様。その時、彼女の流した涙と街の人たちの感謝の気持ちが始末を起す。猫は王子に戻り、お姫様の腕の中で目を覚ます。そして二人は城に帰り、幸せに暮らしましたとき、めでたしめでたし。

「……………」

読み終わっても、ハルは何の反応も示さなかった。最後のページに描かれた王子とお姫様が仲良く並んでいる絵を静かに眺めている。失敗だったかな、と思った。

何か少しでも人間らしい行為をすれば、ハルの中で目覚めている感情を揺り動かせるのではないかと期待したのだが、どうやら俺の見当違いだったようだ。むしろ俺自身が、子供にしてやれなかったことをしたかっただけなのかもしれない。どちらにしろ、始めから

期待しすぎた。じっくりと別の方法を考えるとしよう。

「済まなかった、少し難しい内容だったな」

俺はハルの手から絵本を取り上げようとした。

「……………」

ところが、ハルは両手で絵本をガッチリ掴んで離さない。それどころか、ツツと顔を上げて俺を見つめた。

「猫は、人間？」

なっ…………

俺は言葉に詰まった。

「違う、猫は人間じゃない。このお話では、王子様が呪いで猫にされたんだ」

だから猫が人間ではない。俺はそう説明した。ところが、次にハルの口から飛び出した言葉に、俺は愕然とした。

「ワタシは、人間？」

俺はきつと、馬鹿みたいに惚けていたに違いない。何を、どう答えていいのか分からなくなったというのが正直な気分だ。

ハルは人間ではない。

試験管の中で人工的に遺伝子を弄くられた人形。厳密には、元の遺伝子は日本人なのだから、ハルも人間だろう。生物学的には、そ

うである。しかし彼女たちには、人として本来あるべき感情がない。軍はそれらを不必要として排除した。もし生物学的に判断するならば、狼に育てられた少女も人間だ。

ハルは人間ではない。

そう思ってきた。いや、思わされていた。誰に。軍だ。軍は彼女たちを人形だと言った。俺は、世界はそれを鵜呑みにして信じてきた。しかし現実とは違う。彼女は感情を持っている。少なくとも持ち始めていた。

なんてことだ。

俺は自分の愚かさに気づかされる。

何もかも失い、自暴自棄になり、あらゆるものから目を背け耳を塞いだ。世界が俺に絶望を与えた。違う。絶望していたのは自分自身であり、世界は何も変わっていない。この呪われた世界でも、守らなければならぬものがある。目の前の小さな世界。これをまた俺は否定して、殻に閉じこもってしまうのか。妻は……小夜子は子供を失ったのを自分のせいだと思っていた。あれは事故だ、彼女の責任ではない。なのに俺は、子供を失った悲しみから逃れるようと、妻に冷たくした。彼女が望んでいたのは、俺の言葉だった。

「ハル、お前は人間になりたいのか？」

俺は質問してみる。

ハルは少し首を傾げるような仕草をした。考えこむ間があった。

「人間になれば、分かるのですか」

「何が、だ」

「チューリップが赤い理由」

そういうことか。

天使には、戦闘以外の知識は与えられない。だがハルは、誰かが気まぐれでいれた花の映像に興味を持った。そこから自分が知らない世界があることを知った。今、彼女は歩みだそうとしている。

「……そうだ」

俺はゆっくりと噛みしめるように、自分に言い聞かせるようにハルに応えた。

「人間なれば、わかるようになる」

「それは命令ですか」

「ああ、そうだ……いや、そうじゃない。それがハルの望みだろう」  
「私の、望み？」

「そう、お前は人間になりたい……いや、人間なんだ」

「私は、人間」

機械的なしゃべり方をするハル。しかしもう、ここにいるのは感情のない人形なんかでない。俺はハルの瞳が、微かに揺れ動くのを見ていた。絵本を握りしめる両手が、何かを堪えるようにギュと握りしめられた。

猫が人間になることはない。だが、ハルは元々、人から生み出された。なら人に戻ることだって可能なはず。軍によって奪われた感情を取り戻す。

俺も、ほんの少しの勇気でいい。踏みだそう。

「そうだ、お前は人間だ」

俺は両腕でハルを抱き寄せる。力を入れないように、ソツとだ。とても華奢な体。これでよく、大の男でも失神するほどのGに耐えていると思う。

「何処か痛いのですか」

ハルが、腕の中で囁く。気がつかないうちに、俺は涙を流していた。応えられない。歯を食いしばり、それでも漏れ出す嗚咽が恨めしく、そして心地よかった。

「メディカルセンターに連絡しましょうか」

「いや、いいんだ……医者には治せない」

このままジツとしていてくれ。そう頼むと、ハルは「了解」と小声で応えた。

忘れていた温もりが、ここにあった。

久々の大作戦が間近に迫っていた。

前回の失敗で、太平洋方面軍は多数の作戦機を失っていた。上層部は今回の作戦の為に、ヨーロッパ方面の戦闘機を無理矢理かき集めて、この作戦に投入した。その意気込みたるや凄まじく、このオアフ山基地には以前の倍の数の部隊が集結していた。

どうやら軍は大きな賭けに出たらしい。成功すれば戦局を逆転できるだろうが、失敗すれば戦線は大きく後退する。最悪、ヨーロッパ方面は敵の手に落ちるだろうと噂されていた。

基地の中は人で溢れ、熱気で爆弾が炸裂するんじゃないかという冗談も聞こえた。一步外に出れば、そこは生き物の住めない不毛の砂漠しかない。多くの海を失ったため、地球は次第に寒冷化している。日中でさえ、氷点下を下回ることも珍しくない。だがそんなことさえ忘れてしまう雰囲気か漂っていた。かくゆう俺も、連日激しい訓練でスケジュールは一杯。ハルの相手をしてやる暇もないくらいだ。

そのハルだが、例の絵本がいたく気に入ったらしい。相変わらず感情に乏しい表情のままだったが、暇があると絵本を見ていた。さすがに子供部屋に持っていくわけにはいかないもので、俺の部屋に置いてある。好きなときに見に来いといったら、その通り、ブリーフィングが終わるとすぐに俺の部屋に来た。そして就寝時間まで、飽きもせず眺めて時間を過ごす。おかげですっかり俺は変態扱いだが、他人の天使に手を出さないかぎり誰も文句は言わない。天使に不調が出て困るのは本人であって、他の人間には関係のないことだからだ。軍のお偉いさんも、半ば黙認していることだ。

ハルと一緒にいる時間は、以前よりも長くなった。そして相変わらず喜怒哀楽を表に出さない彼女が、注意して見ると、感情表現らしい癖をしていることに気づいた。たとえば爪をかむような仕草の時は苛ついているときで、嬉しい時は微かに体を前後に振るといふような……

「小春、にしよう」

俺はある日、ハルの名前を小春とすることに決めた。

「コハル？」

ハルは首を傾げる。

「そうだ、ハルは如何にもって感じたが、小春は人間らしい情緒に溢れた名だ」

ハルという名は、どうしても『2001年宇宙の旅』に出てくるコンピュータのイメージが強い。小春日和という言葉がある。小夜子に教えてもらった日本語の中に、そんな言葉があった。ポカポカと暖かい日差しは、何となくハルの雰囲気ピッタリと合う。

「コハルでは、登録出来ません」

「軍の正式な呼び名じゃない。俺と一緒にいるときは、お前は小春だ」

どうも気性の荒いやロウが多い軍隊の中になると、言葉使いが命令調になってしまう。いかんとは思いつつも、どうしても直らない。しかしハルは素直に頷き、俺と一緒にいるときは、自分を小春と呼

んだ。  
嫌な様子はなかった。  
むしろ気に入ったようだった。

「降りろ」

医者は無情にも、そう宣告した。

「駄目だ」

俺は首を振る。

「パイロット資格を剥奪されたら、俺には何も残らない」

「命を失うよりはマシじゃろう」

老医師は、カルテを机の上に放り投げた。細かい文字でビッシリ書き込まれた診断書。おおよそ書かれていることは想像できた。

「本当なら、お前さんはとうの昔に資格を剥奪されていてもおかしくなかった。まあ、資格剥奪ということは別にしても、パイロットは引退しているのが普通だ」

もつとも、時代が時代だから、そんな悠長なことは言っていられなかったかもしれないが、と彼は言葉を続ける。

「しかし体は限界、もう若い者と同じことは出来まい。さらに決定的なのは、お前さんの目だ」

網膜剥離の兆候がある、と医者は言った。

「手術で治せないのか」

「もちろん治せる」

医者は自信ありげに胸を張る。

「だがお前さんの場合、歳が歳だから、間違いなく視力は低下する。幾らアビオニクスが発達したからといって、パイロットは目が良くなければ生き残れないじゃろう……まあ、こういっては何だが、お前さんはよく戦った。国への義務も十分果たした。ここらで潔く地面に足を降ろせ」

「俺にパイロットを止めて、配給センターに並ぶ老人どもの仲間になれとでもいうのか」

飛べないパイロットを抱えるほどの余裕は軍にはない。国に帰ったところで、俺の歳では再就職は無理だ。第一、だからだと続く戦争のせいで、経済はガダガタ、失業率は上がる一方。俺の僅かな蓄えと雀の涙程度の年金だけでは、とても暮らしてはいけない。それになにより、国には俺を待っている人などいない。軍にいれば、少なくとも仲間はいる。それに小春も。

「俺は降りない」

「それを決めるのは、上層部だろ」

医者は書類を両手でかき集めてまとめる。彼がその診断書を俺の上司に提出すれば、俺は間違いなく資格を剥奪される。軍も、高い戦闘機をみすみす失うような判断はしない。

「何とかならないか……せめて、今度の作戦まで」

俺は食い下がるしかなかった。ここで俺が降ろされれば、小春は別のパイロットの補佐に回される。そうなれば、小春が感情を芽生

えさせていることが知られてしまう。不適格の烙印を押され、小春は処分される。

「どうにもならん」

医者は首を左右に振るばかり。

俺は椅子を蹴飛ばして立ち上がると、両手を医者首に伸ばした。細い古木のような首を握りしめて引き寄せる。医者が短い悲鳴を上げた。

「頼む、俺には今度の作戦は重要なんだ」

互いの額がこすれるほどに顔を近づけ、俺は彼の目をのぞき込んだ。

「これが最後だ。後はあんたの言うとおりにする」

だかもし言うことを聞いてくれないなら、俺は医者をここで殺し、小春を連れてこの基地を脱出するしかない。多分逃げ切れない。それが分かっていても、やるしかない。

「なんでそんなにムキになる」

医者は、苦しそうに藻掻いた。だが言葉は辛うじて聞き取れる。

「俺は、飛ぶことだけが生き甲斐の男だ。飛ぶことを取り上げられたら、俺は死ぬしかない」

「そんな、こと、で……」

俺はゆっくりと手に力を入れる。老人の細い首は、ほんの少し力

を込めただけでポキリと折れてしまう。だから慎重に力を加えていった。次第に老人の顔色が赤黒くから土気色へと変わっていく。彼は逃れようと、俺の手首に爪を立てた。皮膚が破れて赤い血がにじみ出す。が、俺はかまわず力を加える。

「わっ……か、た」

手の力を緩めた。老人の体が椅子に崩れ落ちる。ハアハア、ゼエゼエと医者は肩を大きく動かしていた。そんな彼を冷ややかに見下ろす。

「今度の作戦が終了するまで、俺の診断結果はあんたが止めておいてくれ。だがもし、書類を上司に回したり今の件を他人に喋ったりすれば、俺はあんたを殺す」

絶対にな、と念を押した。

「わ、わかつとるわい」

医者は俺を睨み返した。彼に背を向けて医務室を出た。

「勝手に死んでしまえ」

この狂人め、と医者は俺の背中に向かって叫んだ。

管制官からの離陸許可が出た。俺とマイクは並んで滑走を開始する。今日の操縦桿の感触は、やや重たげだった。胴体下にいつもの長、短距離ミサイルを各六発ずつの他、巨大な増漕をつり下げているせいだ。だからいつもより長めに加速してから、ゆっくりと操縦桿を引き寄せる。フワリと翼が風を掴んで空に浮かんだ。とてつもない推力を秘めたP&W311は、この状態から垂直上昇が可能だ。だが機体に無理をさせたくなかった。俺自身にも。

ギア・アップ。スロットルはミリタリーの位置をキープ。上昇し、巡航高度へ。

「ハル、航法チェック」

(了解)

GPSによる支援のない今、頼りはFMCに内蔵された慣性航法システムとハルの高速演算能力だけだった。特に、今回の作戦空域は遙か彼方にある。途中、何度も給油機から燃料の補給を受けなければならなかった。位置を見失って迷子になれば、燃料切れで墜落するしかない。

作戦区域にたどり着くまで、俺は小春と一言も喋らなかつた。機上での会話は全てAWCASを通して作戦本部へと送られている。滅多なことを口にするわけにはいかない。小春が例の俺だけに伝えられる方法をとらない限り。だがあれは小春が意識して行ったものではなく、その方法は当の本人にも分からないようだった。だから俺は胸に秘めた考えを彼女にも話していない。

俺の目的、それは小春を逃がす事だった。

きつかけは医者パイロット生命の終わりを告げられた瞬間だった。彼女は感情を持ち始めている。彼女たちを機械として扱ってきた俺たちには、その事実を認める事は出来ない。あくまで機械だから、使い捨ても出来た。しかし人間なら、俺たちと同じ人間を使い捨てにすることなど……

絶対に、小春を軍に渡さない。

だが俺が本国に帰ってしまったえば、小春は間違いなく処分されるだろう。彼女たちが人間であることを、軍は必死に隠そうとするからだ。

しかし逃がすと言っても簡単ではなかった。年端もない少女を砂漠に放り出すことなど出来ない。不毛な砂漠では、屈強な男でも生き延びるのは難しい。まして小春は戦闘以外の知識を殆ど持っていなかった。だが何よりも問題なのは、彼女を迎えてくれる場所がない事だ。唯一、受け入れてくれそうなのは、彼女と同じ日本人だろう。本国にも少数ながら生き残った日本人がいる。しかし彼らが同族という理由だけで匿うとは思えないし、それ以前に入国させる方法すらなかった。そこで俺が思いついたのは、タイラーのひと言だった。

日本人の生き残りがいる。

俺は細い人脈を頼りに、何とか情報を得た。生き残った日本人が住むコロニーの場所も聞き出すことが出来た。そしてそれが今回の作戦区域に非常に近いこともだ。

チャンスは一度きり。

戦闘のどさくさに紛れて軍を抜ける。

敵前逃亡罪は銃殺刑だ。けれど俺には家族はない。私物と言えるのは、フライトスーツのポケットに押し込んだ、例の絵本だけ。躊躇う理由はない。問題はいつ実行するかだ。

俺の左右には三機のラプターが並んで飛んでいた。彼らの目を上手く誤魔化して脱出するタイミングが難しい。しかも頭上を飛ぶAWCASのレーダーから逃れるためには、地表スレスレを、さらにかつての海溝や海底の起伏の影を利用して隠れる以外にない。たぶん、これまでの人生で勝ち得た技量の全てを發揮しなければならぬだろう。

不思議と心は平静だった。

むしろ目標を持った事で、俺は何もかも失って以来、久しぶりに心の底から燃え上がるような闘志に包まれていた。

時間は、無情にも過ぎ去った。

予定されていた最後の給油を、ほんの五分ほどまえに済ませた。だが今だに敵は現れない。正確には、俺たちの担当する空域に、だ。

前回とは違い、今度の作戦は軍が自信をもって準備していただけあって、戦況は我々に有利のまま推移しているようだ。レシーバーから流れるパイロットたちの会話からも、緊張の色が薄れている。だが彼らとは対照的に、俺は時間の経過と共に焦燥感を募らせていった。

敵は何している。

このままだと、一発のミサイルも発射しないまま、すぐすごと基地に戻る羽目になる。

そうなればお終いだ。医者は俺が出撃するまで大人しくしていたようだが、その後はどうしたか俺には知る由もない。暴行されたこ

とを告げ口しているかもしれないし、パイロットとしての適正を欠いているという報告書を提出しているかもしれない。無意識のうちには何度も操縦桿を握りなおす。直ぐにでも編隊から離脱したかった。しかし出来ない。今は、まだ駄目だ。

『中尉、上を見てください。新型機です』

緊張感の欠片さえない、呑気なマイクの声に、俺の苛立ちは更にハネ上がる。

『次期主力戦闘機として開発されていたワイバーンですよ』

怒りを表に出してはマズい。感情を隠すため、俺は言われるまま空を見上げた。灰色にくすんだ空に、小さな黒いシミが見えた。数は一つ。見たことのない機影だ。眼をこらすと、珍しいカナード付き前進翼機なのがあった。

『正式な配備もまだの機体を戦線に投入するとは、上も今回は気合が入ってますね。噂だと無人機だそうです。搭載されるのは高度なA.I。天使だとか』

新型機のコクピットに押し込まれた人形のような子供の姿が頭に浮かんだ。

『あれが実用化されれば、俺たちパイロットはお払い箱ですね』

フン、と俺は鼻を鳴らす。

戦場で人の形をした機械同士がつぶし合う。嫌な光景だ。そんな場所に小春を送り込みたくはないな。

！

不意に、上空を飛んでいた新型機がフラツとバランスを崩したと同時に、クルリと横転ロールした。

何処かで見た覚えがある。だが思い出せない。考えている間に、機影は雲の影に隠れて見えなくなってしまうた。何だったのだろう。この既視感デジャヴは。必死に思い出そうとする俺の適当な相づちにもかかわらず、マイクは蕩々と喋り続けた。

更に時間が過ぎた。

俺の焦りは頂点に達しつつあった。

タイムリミットはもうギリギリ。残存燃料は目的地までの分を差し引くと、ほとんど余裕がない。もしこのまま帰投命令が出れば、最悪、仲間との戦闘を覚悟してでも離脱するしかない。

が、神は俺たちを見捨てなかつたらしい。

『ワン、敵だ、十二時方向、数、四』

ようやくか、と、俺はAWACSから送られてきたデータでそれを確認した。真正面だ。高度はこちらより五千フィートほど低い。敵編隊は目の前を東から西へと飛び抜けようとしていた。条件はこちらが有利。敵は殺ってくださいと言わんばかりに、柔らかい腹を俺たちにさらけ出していた。臭い芝居だ。前回の教訓が俺の脳裡に過ぎる。

「ハル、上空監視」

俺の勘は当たった。

(十時方向、高度三万フィートに敵、数は四)

馬鹿正直に目の前の敵を追っかける俺たちを、上空から降りてきた別の一隊が叩く作戦だろう。古典的なサンドイッチと呼ばれる戦法だ。だが俺は、あえて敵の罠に飛び込むつもりだった。これがラストチャンス。

「全機、俺についてこい」

カチカチ、というジツパーコマンドが聞こえた。了解の合図。ドロップタンク切り離すと、俺は機体を右へロール。緩やかな右旋回降下で、敵の編隊の背後につく。ロックオン。HAMRAMに敵のデータを入力。シュート。各機体から一発のミサイル。計四発の金属の獣は、獠猛な牙をむきだして敵を追いかけ始める。

（直上より敵機）

敵、全機パワーダイブ。一撃で仕留めようと、俺たちに向かって音速で突っ込んで来た。

「ブレイク」

俺がそう言い放った瞬間、編隊は二つに分かれた。俺とマイクはそのまま降下。残りの二機は上昇を開始する。敵は、この俺たちの行動に面食らったようだ。一瞬、どちらを追いかけべきが迷ったに違いない。そして敵も二つに分裂した。

よし、と俺は内心ほくそ笑む。状況は俺の思い描いた通り。もし敵が片方だけを追いかければ、残りの二機が敵の背後につく。敵もそれを恐れて二隊にわかれたのだろう。しかし、俺の狙いは最初からそれだった。

俺の背後にいるのは、二機の敵戦闘機だけ。俺たちにミサイルを撃たれた一隊は、チャフとフレアをばらまきながら高速で戦闘空域から逃げだしていた。暫くは戻ってくることもないし、この戦闘も一分と続かない。地上スレスレで乱戦に持ち込めば、何とか逃げ出すチャンスも生まれるはずだ。俺は降下速度を緩めることなく、地上に向かって突っ込む。マイナスGで体が浮き上がりそうになる。

正面にはぶ厚い雲が浮かんでいた。

「マイク、俺が囷になる。離脱して、後ろの敵を片付ける」

マイクからのジッパーコマンド。二機で雲に突入。その瞬間、マイクの機体が機首をグツと引き上げるのを感じた。減速。まるでかき消すように、俺の隣からマイクが消えた。瞬間的だが、きつと十五、六Gの重力が彼に襲いかかっている。必死にブラックアウトと闘いながら、やり過ぎた敵の背後につくため、朦朧とした意識の中で操縦桿を操っているのだろう。俺には、もう無理だ。とてもあんな大Gに体が持たない。若さというものは、時に経験と技量の差をあっけなく埋めてしまう。現実を目の当たりにすると、さすがに俺もロートルなんだな、と思い知らされる。が、感傷的になっっている暇などない。

パツと視界が開けた。

雲を抜けたのだ。突入してから、一秒と経っていない。高度は一万フィートを割っていた。目の前に迫る灰色の砂漠。と、俺に続くように、二機の敵が雲をぶち破って現れる。近い。敵は後方三百メートルの位置につく。ミサイルは使えない。

(ガン攻撃照準波、感知)

小春に言われるまでもなく、耳障りな警告音。完全にロックオンされないよう、俺は機体を見えない樽の縁をなめるように旋回させながら降下。スパイラル・ダイブ。しかし大昔の戦闘機ならいざ知らず、現代の機銃は軸線周りに数度銃身を動かすことが出来る。所詮時間稼ぎにしかならない。それでも動きを止めた瞬間、敵の三十

ミリ機関砲弾が俺と俺の機体をズタズタに切り裂くのは間違いなかった。

重力と旋回に伴うGで、俺は苦痛のうめき声をあげる。だが、俺よりも敵のパイロットの方が苦しみはより大きいはずだ。距離を詰めよう追ってきた分、速度も俺の機体より速い。オーバーシュートを恐れて、敵はより旋回半径の大きな螺旋を描かなければならない。

俺と敵の軌跡は次第に接近し、遂には複雑に混じり合う。こうなると根比べだ。俺が苦痛に負けて螺旋の外へ飛び出せば、敵は容易に背後を取る。だがタイミングを誤れば、地面へ激突だ。それを恐れて追撃を止めれば、今度は俺が敵の背後を取る。チキンレース死の二重螺旋だった。

しかし年寄りの俺には、このレースは分が悪い。心臓は今にも止まりそうだ。マイクはまだかと、心の中で待ち望む。ずいぶん待ったよくな気もするが、実際は僅かな間だった。

『中尉、今です！』

その合図で、俺は渦の中から飛び出した。勝った、と敵も旋回を止めて俺の背後につく。ロックオンされた。

だが次の瞬間、マイクの放った短距離ミサイルが、敵の胴体を射抜く。

やった、と思ったのもつかの間だった。もう一機の敵は、強引とも思える機体の引き起こしで、マイクの放った一撃必殺のミサイルを交わした。紙一重の差。ここに来て経験のなさが如実に表れた。俺なら、もう一呼吸待って、ガンで敵を仕留めただろう。ミサイルの近接信管が作動しなかったのは、俺と敵との距離が近すぎたからだ。AIが味方を巻き込む事を恐れた。親切な事だ。だが、その優

しさが俺を殺す。

殺られる。

もう駄目だと思った。ところが、敵は俺のことなど無視したように反転、上昇を開始する。逃げるのか。

しめた、と俺は一瞬思った。このチャンスを生かして、最大推力で戦場を離脱しよう。だが上昇した敵の行く手にマイクの機体があるのを見て、そんな考えなど吹き飛んでしまった。

「マイク、敵だ。そっちにいった、ブレイク、回避しろ」

マイクは反転、無防備な背中を向けて離脱しようとしていた。上昇して再度攻撃するつもりだったのかもしれない。馬鹿が、と俺は舌打ちした。何故降下して逃げなかったのか。上昇すれば、その分速度を失う。しかもアフターバーナーを全開に焚いていた。その熱は、敵の赤外線ミサイルが完璧に捉えていた。逃げられない。

「マイク！」

俺は、無意識のうちに機体のリミッターを解除。アフターバーナーオン。推力変更パットを最大仰角へ。操縦桿を思い切り引く。すると機体は、その場で垂直に立ち上がる。コブラ。瞬間的に、視界が真っ暗になる。だが微かに見えたレティクルの中に、俺は敵の機を捉えていた。ガン、ファイヤー。1秒間に百発を越える弾丸が、高速で敵の胴体に叩き込まれた。敵は真っ二つになる。爆発。目も眩むような光の玉が空中に出現する。まぶしい光が、俺の視界からマイクの機を覆い隠した。

失速。

急激な機動で、速度を失った俺の機体は、緩やかに大地に向かって落ちていった。それと同時に、俺の意識も遠くなる。まるで深い闇の中に落ちていくようだった。

意識を失う直前、小春が俺を呼んでいるような気がした。

気がつくと、機体は地表を嘗めるように飛んでいた。眼下に流れる灰色の砂漠は、途切れることなく続いている。

「ハル、現在位置とコースの確認」

応えはすぐにあつた。それは俺が事前にプログラムしていたコースと、寸分の狂いもない。ただ目的地に辿り着くには燃料が足りない。まあいい。少し歩くことにはなるが、小春を外の世界に慣らすには丁度いい運動になる。

A W A C Sとのリンクは途切れていた。無線封鎖を実行したからだ。ハルにはこれも作戦の一環だということにしてあるので、彼女もあらゆる味方の呼びかけにも応じないようにしていた。よしよし、良い子だ。

あれだけ乱暴に扱ったにしては、機体に何のトラブルも発生していない。エンジンも快調な唸りをあげている。高度が低いので、速度は上げられないが、エンジンは自動で経済的な推力を保ちつつけていた。到着まで、小1時間といったところか。何もかも順調で怖いくらいだ。

「小春、もうすぐだ、もうすぐお前を自由にさせてやれる」

(質問の意味不明です)

「いいんだよ、いずれ分かる」

俺は左手をスロットルレバーから離し、フライトスーツのポケットを撫でた。布地越しに感じる堅い紙の手触り。小春の絵本。その感触は、いままでにない現実感を俺に与えてくれた。いや、今まで

が夢のようなものだったのだ。子供を失い、妻を失い、守るべきものの全てを失った俺を、軍は闘わせ続けた。滅びかけた地球で、ただほんの僅かに残った資源を奪い合う戦争に、何の意味がある。俺はそれら全てに嫌気が差し、感情を押し殺すことで何も感じないフリをしていた。だが、これからは違う。俺には小春がいる。彼女を本来の姿に戻すことこそが、俺のこれからの人生の役目だ。殺し合いなんて、もうゴメンだ。俺は未来に思いを馳せた。

（警告、攻撃照準波感知）

ハルの声で、俺は厳しい現実を引き戻される。

「敵か？」

「現在飛んでいる空域は、味方でも敵のものでもない、ちょうど緩衝地帯のような場所だ。だからといって、敵がいなわけではない。」

「どことだ」

見回しても、視認出来る距離に敵の姿はなかった。

モードステルス。低空を飛ぶ機体が発生させる赤外線は、暖められた砂漠の熱に紛れ込んで見つけにくく、さらに排気にもインテークから取り込んだ冷気を混ぜて温度を下けている。機体の全面に張り付けられたスマートジャケットは、周囲の環境を判断し、カメラオンのように機体の色彩を変化させていた。もちろん砂煙を巻き上げるようなドジはしていない。つまり肉眼でこの機体を見つけることはほぼ不可能。だが見つかった。攻撃用レーダーの索敵範囲は狭い。AWACSの支援もなしに、この広い砂漠の中から、一発でこちらの位置を特定するのは不可能に近い。

『中尉』

この声はマイクか。

一瞬、安堵感を感じ、すぐに思い直した。

俺を連れ戻しに来たのなら、何故狙いを定めている。

『中尉、お願いがあります』

様子を変だ。声が震えていた。

『……機体を捨てて脱出してください』

何だと、俺は耳を疑う。

「それは、どういうことだ」

マイクの機影を探す。地上にそれらしいものは見えない。

『中尉には射殺命令が出ています……でも、自分はあなたを殺したくない』

そうか、その一言で俺は理解した。軍は俺を脱走したと判断したが、次の言葉で俺は愕然となる。

『その機体と天使には回収命令が出ています。自分は中尉を基地に連れ戻すよう命令されました』

どういふことだ。俺を射殺するなら、今、この場で撃てばいい。戻ったところで、軍事裁判になどかけるつもりはないだろう。なのに、そんな手間をかけて消耗品であるはずの天使を回収する理由はなんだ。

「拒否したら、どうするつもりだ」

最初から騙すつもりなら、俺に機体を捨てて逃げろとは言わないだろう。

『強制手段を使わせていただきます。僕はあなたを死なせたくない……ハル、緊急アクセスコードEAC3847568woy……外部アクセスポート開放』

(了解……)

ハルは意図もあっさりシステムを解放した。

「待て、ハル」

俺の声……届かない。外部から強制介入するには、安定した通信環境が必要。この状況でそれを実行するには、機体同士を接近させてのレーザー通信しか方法はなかった。俺はマイクの機体を探すが、が見つかからない。

『命令、フランク中尉より機体のコントロール権を剥奪、緊急脱出システムに介入し、彼を射出せよ』

クソッ！

射出座席の主導権は俺にある。だがそんなもの、ハルなら簡単に切り替えることが出来た。止める、と叫び、半ばヤケクソになって

操縦桿を滅茶苦茶に動かす。反応なし。

これで終わりなのか……

絶望感に捕らわれた。

今にも頭上を覆うキャノピーが吹き飛び、俺は機外へと放り出されるかと思った。だがその予想は意外な形で裏切られた。

(強制射出は拒否します)

「！」

俺は、驚きを隠せない。

マイクも愕然としたようだ。動揺を隠せない様子で、もう一度命令を繰り返す。

『再実行、パイロットを強制射出しろ』

(拒否……機体、パイロットの身体共に異常はなし、強制射出の必要を認めません)

レシーバーの向こうからマイクの震える声が届いた。

『天使が命令拒否だと……そんな馬鹿なことが』

なんてことだ……

不意に可笑しさがこみ上げてきた。ゴム臭いマスクの中で、口元が綻びる。堪えきれず体を折り曲げてクククつと笑った。もうハルは、ただ命令を実行するだけの人形ではない。意志を持った小春と言う人間だ。ザマアーミロ。

(高速熱源体接近)

ハルの警告。操縦桿に感触が戻る。即座にリミッターを解除。スロツトルをミリタリーの位置に押し込む。最大出力。P & W 3 1 1 は咆吼を上げて、背中を蹴り飛ばされたような衝撃に襲われた。さつきまで感じていた可笑しさは消し飛ぶ。

『頼む、待ってくれ』

懇願するマイクの声。だが願いは聞き入れられなかったのだろう。

『中尉、逃げて、逃げてくだ……』

声途切れた。その途端、俺の斜め左上に爆炎があがった。HMDに表示された後方視界。迷彩モードが解け、火だるまになった機体が出現。マイクだ。至近距離から攻撃を受け、機体がバラバラに碎けながら地面に墜ちていく。

分解していくマイクの機体。その影から小さく白い機影が現れる。記憶にない機種。いや、見覚えがある。確か軍が投入したばかりの新型の無人戦闘機。

マイクが大地に激突した。

一瞬、真っ赤な炎が沸き上がる。だがたちまち後方に遠ざかって見えなくなった。

白い機影が迫る。ラプターより二回りほど小さい。その動きは信じられないほど俊敏で、飛び散る機体の破片と破片の間を易々とくぐり抜けていた。人間には不可能な操縦。神の領域を見た気分にな

った。

「殺られてたまるか！」

俺は叫んだ。だがミサイルのごとき速度で迫る無人機に比べ、こちらの加速は鈍い。まるで兎と亀のレース。と、燃料の警告灯が点いた。残存燃料ゼロ。アフターバーナーカット。ガクンと加速が鈍った。肉薄する無人機。悪あがきでチャフやフレア、さらには発達型デコイまで試すが、あざ笑うように無人機は俺の後方にピタリと張り付いた。

「うおおおおお！」

自機と敵のシンボルマークが、レーダー画面で重なった時、俺は強烈な衝撃を背中に感じた。直撃。機関砲弾が左エンジンを吹き飛ばした。機体は横転を始める。俺の頭上を地面と空が交互に入れ替わる。

無人機は一撃したのち、機体の脇をすり抜けていった。高速で流れていく大地の上を、滑るように飛び去っていく。フワリと機体が浮かぶ。高度を取ると、少し右に傾いだから素早く左にロールをうち、横転を終えると同時に垂直に上昇していった。

「！」

その動作には見覚えがあった。

バルザムだ。俺の副官だった奴の癖。

記憶が蘇る。マイクが喋っていた。新型の無人機に搭載されるのは天使。もしあれがバルザムの天使だったのなら、奴の癖を覚えていても不思議はない。

そうか。

俺は悟った。

軍は、この為にハルを回収しようとしたのだ。軍が必要としていたのは、俺たちロートルのパイロットではない。実戦で経験を積んだ天使。人間のパイロットを超える戦闘人工知性体。消耗品は、俺たちの方だった。

「……フザケルな」

コクピットにある七つのモニター全部がフェイル。緊急事態を告げるコーションライトが激しく点滅する。油圧ダウン。左エンジンに火災発生。自動消化装置……作動せず。

「い、言う、こと……をきけ」

俺は必死に機体を安定させようとするが、反応は鈍かった。そうこうしている間に、左エンジンの炎が右エンジンに燃え移った。スズンと腹に響く音と共に、右エンジンもストール。急速に電力が低下する。魂が抜け落ちたように、ストンと操縦桿の手応えが消えた。操縦不能。

コントロールを失った機体は、ゆっくりと機首を地面に向けた。だがその時、もう一度右エンジンが爆発。その反動で、一瞬、機体が水平に戻った。

迷わず緊急脱出装置のセレクターを後、前席射出位置へ切り替え、フェイスガードを思い切り引く。

ポフツ、という音とともに機体中央部のカバーが吹き飛んだ。生まれて初めて小春は外気に晒される。ついで座席ごと射出。一瞬の間

をおき、俺の頭上を覆っていたキャノピーが吹き飛ぶ。座席下の口  
ケットモーターが点火。業火と共に空中に放り出される。刹那、機  
体が爆発した。突き上げられるような衝撃で、俺は椅子にしがみつ  
いたままグルグルと回転し……

そして気を失った。

あれから、どれくらいの時間が経ったのか。

(……………)

意識を取り戻した時、俺は砂漠の中にゴロリと横たわっていた。近くでバサバサと音を立てるものがあるのに気づき、うつすらと目を開けて見る。パラシュートが風に弄ばれていた。枯れた立ち木に絡みついたそれは、まるで死に神が「おいで、おいで」と俺を手招いているようだった。

体を動かそうとしたが……駄目だった。

まるで言うことを聞かない。指先一つ動かない。目の前に赤茶色の大地が見える。砂漠を抜けた記憶もないので変だなと思ったら、それは俺の体から流れ出した血と灰色の砂が入り交じったものだった。

頭を少し持ち上げてみる。腹に剣のように鋭く突き出た金属片が刺さっているのが目に入った。ブルーグレイのスーツが真っ赤な血で染まっていた。道理で、体が思うように動かないわけだと、俺は他人事のように考えた。思ったより痛みは感じない。感覚が麻痺しているようだった。

と、遠くから陽炎のように小春が姿を現す。

小春は、彼女の体には不釣り合いなほど大きな医療キットを両手で抱えて走ってきた。天使たち専用のフライトスーツは、センサーや電子機器との接続プラグが至る所に張り付いていて、酷く走りにくそうだった。まるで生まれたばかりの子犬が、蹠踏めきながら母親の元へ必死に駆け寄っていく姿に似ていなくもない。

転ぶなよ。

俺は死の瀬戸際にいることも忘れて、娘を見守る父親のような暖かい眼差しを向けている自分に気づいた。

「小春……」

俺の側に辿り着いた小春は、両膝を大地につき、屈み込んで俺の傷の様子を見る。傷は、年頃の娘なら悲鳴を上げているほど酷いものだろう。だが彼女は気にした様子もなく、ただ自分の手に余ることだけは判断したらしい。医療キットからモルヒネ注射を取り出し、同時に俺のフライトスーツに括り付けられている救難信号発信機に手を伸ばした。

「いいんだ」

さっきまでピクリとも動かなかった俺の右手は、嘘のように、あっさりと動いて小春の腕を掴んだ。

「どのみち、助からん」

俺は小春をグッと引き寄せる。もう喋ることも億劫になってきた。彼女はそんな俺の考えを見抜いたように、身を乗り出して俺の唇の上に耳を近づけた。

「俺はもう、お前を連れては行けない。ここから先は小春だけで行くんだ」

小春はジッと耳を傾けて聞く。以前の俺なら、感情のない人形に

話しかけているようにも思えただろう。だが今は、微かな感情の變化を彼女の瞳の奥に見いだせる。小春は泣き出しそうな目をしていった。

「不安はあるだろう。だけど、小春なら大丈夫だ。このまま北西に向かって真っ直ぐ進め。お前なら辿りつける」

「それは、命令ですか？」

小春の問いに、俺はゆっくりと頷く。

「そうだ、これからのお前の任務は、生き残ることだ……自由に、誰からも命令も束縛もされない……生き方……」

俺は、意識が次第に薄らいでいくのを感じた。チクショウ、小春に話したい事は沢山あった……のに、何を言うべきか思い出せなくなってくる。

「そうだ……」

肺に残った空気を絞りだすように、俺は言葉を紡ぐ。

「例の……赤い花のことだがな……」

小春は黙って聞く。

「花が……赤いのは……い、き……生きて……いる証だ」

俺は血に染まった手を小春の目の前に差し出す。

「見る、俺の血も赤いだろう……小春の血も、同じように赤い……」

これが、生きている証だ」

言い終わると同時に体から力が抜けた。ストーンという感じで、右手が地面に落ちる。小春は、俺の言いたかったことを分かってくれただろうか。多分、大丈夫だろう。視界が次第に狭まっていく。そこに見える小春は、相変わらずだ。戸惑っているのか、それとも悲しんでいるのか分からない。だが彼女は天使であることを止める。俺は確信していた。グッドラック、小春。俺は精一杯微笑んでみせる。

やることはやった。神よ、もしあなたが本当に存在するならば、小春の未来を明るく照らしてやってくれないか。瞼がトロンと落ちた。小春の顔が見えなくなる。

小夜子……

あの世で彼女に再会出来たら、真っ先に謝ろうと思う。  
妻の涙に濡れた横顔を、冷たく突き放した俺の過ちを……

中尉は、死んだ。

「……………」

跪き、冷たくなっていく彼の亡骸を見つめ続けた。

どれくらいそうしていただろう。

照りつける日差しは砂の上に流れた血を乾燥させ、吹き止まない風は彼の体を砂で覆い尽くそうとしていた。

私は、どうすればいい。

直属の上官である中尉が死んだことで、私に命令する者はいなくなった。頭の中には帰還せよとの命令が兎玉のように鳴り響いている。無意識のうちにフライトスーツのビーコンの発信器に手を伸ばす。しかし、その手は発信機に触れる前に止まった。中尉の最後の命令を思い出したからだ。任務は、まだ終わっていない。生き残ること、自由に、束縛されることなく生きること。それが彼の最後の命令だった。けど、それ以上に、私の心の奥から沸き上がるものが、私の体を突き動かした。

私は、立ち上がる。

中尉が指し示した北西の方向を見た。果てしなく続く砂漠の海。僅かな生命さえも拒む乾いた大地の向こうに、果たして何かがあるのか。そして私は、そこで何を見ようというのか。

花が赤いのは、生きている証。

中尉が最後に教えてくれた言葉。彼の血で真っ赤に染まった両手を目の前に持ち上げてみる。私にも同じ赤い血が流れていた。私も生きている。だが、生きているとはどういうことなんだろう。尋ねようにも、中尉はもう応えることはない。私は途方に暮れた。そして頭上を仰いだ時、その場で凍り付いた。

真っ青な空。

どこまでも、透き通るように広がる空がそこにあつた。電子カメラが捉えた映像ではない。生の空。自分の目で見た青空だった。

キレイ……

胸が震えた。こんな感覚は初めて。空がこんなに青いなんて、今まで知らなかった。あれほど飛んでいた空は、こんなにも美しかった。

涙が、あふれ出た。生まれて初めての涙だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6112t/>

---

Air Warrior Angel [ ネット版 ]

2011年5月29日18時02分発行